



Title	「経験」の展開：日中両語間の相互影響と語義的変容
Author(s)	孫, 暁
Citation	大阪大学, 2019, 修士論文
Version Type	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/90735">https://hdl.handle.net/11094/90735</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

## 本論文に関する説明

本論文は、大阪大学の機関リポジトリOUKAでまとめて公開している日中語彙交流に関する以下の修士論文（文学研究科文化表現論専攻日本語学専門分野）8編の1つです。

- 朱 暁平：近現代漢語接尾辞「者」の成立と展開（2018年）  
孫 暁：「経験」の展開—日中両語間の相互影響と語義的変容—（2019年）  
沙 広聡：接尾辞「性」の歴史—日中両語間の相互影響—（2020年）  
崔 蕭寒：「摩擦」の語史—日中両語の相互影響—（2021年）  
袁 書予：「分析」の成立と変化（2022年）  
馮 玥：「反応」の語誌（2022年）  
張 静怡：「中和」の成立と変遷（2023年）  
張 梓旋：「発明」の成立と展開（2023年）

いずれも独自の発見や考察を多く含む力作で、未完成の要素もあるにせよ広く読んでいただけるよう各著者の了解を得て公開することにしました。

論文への言及時には、「大阪大学大学院文学研究科修士論文」とお書き添えいただければ幸いです。「大学院」の3字はなくても差し支えありません。

なお、朱暁平さんと崔蕭寒さんの修士論文については、主要部分を抜粋、改稿した論文が『或問』第33号（2018年）、第39号（2021年）にそれぞれ掲載されています。また、沙広聡さんの関連する論文が『東アジア国際言語研究』第2号（2021年）と『阪大日本語研究』34（2022年）に掲載されています。

田野村忠温

2023年3月

修士学位申請論文

「経験」の展開

— 日中両語間の相互影響と語義的変容 —

大阪大学大学院文学研究科博士前期課程

文学表現論専攻 日本語学専門分野

学籍番号 20B17019

孫 暁

## 要旨

「経験」の語は現代日本語、中国語において「実際に見たり、聞いたり、行なったりすること。また、それによって得た知識や技能」などの意味で使われているが、古典籍の用例によるとそれは“薬に効果がある”などを意味する医学用語であった。本論文は、日中両語それぞれにおける「経験」の語義変容過程を確認した上、「経験」をめぐる日中両語間の相互影響についても考察した。

「経験」の語史について、日中いずれか一つの言語における、あるいは一つの特定期間における「経験」の意味変化を考察するものはあるものの、日中語彙交流という観点から出発した「経験」の語史全体に関する先行研究は未だ見られず、その結論には検討の余地が残されている。それらの先行研究を踏まえて、第3章にて「経験」の語史と両語間の相互影響を述べた。

用例分析によると、「経験」は5世紀の漢籍に見られる中国語の在来語であるため、まず第3.1節において、中国語における“検証を経た”という「経験」の原義とその後の意味拡張を記述した。

そして第3.2節において、日本語における「経験」の意味変化を考察した。漢方医学書を媒介として「経験」が江戸時代に日本に紹介され、それから程なくして“薬の効き目”、“試みる”などの意味まで拡張された。また、明治時代に入ると「経験」は *experiment* や *observation* の訳語として用いられ、哲学用語として抽象的な意味を獲得することを通して、*experience* の定訳になり、現在の意味に定着した。その流れを3.2.1から3.2.4まで、四つの小節を跨いで述べた。

最後に、「経験」は日中両語それぞれにおける意味変化の全容を把握した上、両語間の相互影響を論じた。第3.3.1小節では、中国から日本への伝播過程をまとめ、続いて第3.3.2小節では、日本から中国への逆輸入のルートを探って見た。結果として、それを遊歴官員による伝播、中国の蚕業改革における日本との交流、日清戦争後の和書に対する大規模な翻訳活動との三つにした。この中、抽象的な意味を持つ「経験」の中国への逆輸入を実質的に決めたのは、日清戦争後の和書翻訳活動であった。

本論文はいずれの節においても、具体例の分析を重んじて論じた。それらの具体例、及び本文に挙げられなかったものも含め、全てを年表にまとめて末尾に添付した。

## 目次

1.はじめに .....	1
2.先行研究と問題点.....	1
3.「経験」の語義的変容 .....	2
3.1 中国語における「経験」の語義的変容.....	3
3.1.1「経験」の初出と原義 .....	3
3.1.2 原義からの拡張 .....	5
3.2 日本語における「経験」の語義的変容.....	8
3.2.1 日本語での初出とその意味.....	8
3.2.2 意味拡張 .....	9
3.2.3 訳語としての使用 .....	13
3.2.4 意味定着 .....	19
3.2.5 まとめ.....	20
3.3 日中両語間の相互影響 .....	21
3.3.1 中国から日本への伝播 .....	21
3.3.2 日本から中国への逆輸入.....	22
4.結論 .....	27
5.おわりに.....	28
参考文献.....	29
「経験」年表 .....	30
(A)中国語における用例 .....	30
(B)日本語における用例 .....	34

## 1.はじめに

現代語における「経験」は哲学用語にとどまらず、日中両語のどちらにおいても社会、日常生活で広く使用される一般用語であり、日中同形同義語<sup>1</sup>でもある。現代語では主に「実際に見たり、聞いたり、行なったりすること。また、それによって得た知識や技能」<sup>2</sup>の意味で使われているが、その語源を遡ってみれば、医学関係の資料における“ある薬に効果がある”を表すのが主要な用法だった。

日中同形同義語になるのは自然に、両国が互いに影響を与えたり、受けたりした結果だと考えられる<sup>3</sup>ため、それらの語源を探る際に日中両語間の相互影響の視点から考察するのが普通である。日中両語間の相互影響から出発する従来の研究には、大量の用例を調べて近代日中語彙交流の全容を把握しようとするものと、一つまたは関連のあるいくつかの語を取り上げて、その成立、伝播、普及の流れを描こうとするものがある。しかし、この近代日中語彙交流の観点から、「経験」の一語に絞って、その語義変容の流れ全体を考察した研究は、管見の限りまだない。

「経験」の語は、江戸時代に漢方医学の専門用語として中国語から日本語に輸出され、日本語として新たな意味を与えられた。このような経緯の後に、19世紀の末期から20世紀の初頭にかけて、今度は日本語から中国語に逆輸入されたという過程を歩んできた。本論文では、日中両語それぞれにおける「経験」の語義変容を確認しながら、「経験」をめぐる日中両語間の相互影響についても考察する。

## 2.先行研究と問題点

中国側では、近代語彙交流の概説になるものなら沈(1994)、陳(2001)などが挙げられるが、いずれにも個別語の語史についての考察<sup>4</sup>が少なく、「経験」は触れられていない。簡潔な記述しか行っていないが、「経験」の語源を語ったものは、劉他編『漢語外来詞詞典』(1984)がある。

【经验】 jing yan 由实践得来的知识或技能.

[源]<sup>5</sup>日 經驗 keiken [意译英语 experience]

（【經驗】 jing yan 実践から得た知識や技能。

[語源]日本語「經驗」 keiken [英語 experience の意識]

<sup>1</sup> 文化庁『中国語と対応する漢語』に収録されているS語（日中両国語における意味が同じか、または、きわめて近いもの）を同形同義語とする。

<sup>2</sup> 小学館『日本国語大辞典』第二版（2000～2002年）より。

<sup>3</sup> 相互的な影響があまりなく、日中両言語の各自の発展によるものだが、偶然に同形同義語になった語もあるといわれているが、それは「英語」のようなその形以外、他の語形になりにくいものに限っているので、極めて少ないだろう。「英語」の語史の推定は田野村（2018）に参照されたい。

<sup>4</sup> 沈（1994）には「関係」「影響」、陳（2001）には「化粧」などについての考察が見られる。

<sup>5</sup> この“語源”は語としての出身－「経験」という語は中国語にはなく、日本によるもの－を指すか、それとも上記の意味で使われる「経験」は日本から来たことを指すかは凡例ではされていないため、判断しにくい。

一方、日本側では「経験」の語源、特に明治期の訳語としての使用について考察しているものは複数あった。それぞれの切り口は異なっているが、「経験」の語史に関する結論は大差がない。その中代表的なものを二つ取り出して記述する。

安井(1968)は、哲学用語としての「経験」を取り上げ、明治時代における日中両国の英語辞書を対照しながら起源を考察した。結論は主に次のようにまとめられる。『佩文韻府』<sup>6</sup>の「験」の項目に「経験」の語は登場していないため、「経験」は「中国語の、少なくとも古典的語彙の中に存在しなかっただろう」と、「ほぼ確実に推定できる」。そして、「経験」は明治初期に日本で「experiment」ないし「experience」の訳語として造られ、おそらく明治後期に中国へ渡ったという。その証拠として、日本では早くも明治5(1872)年の『和英語林集成』(第2版)に既に「経験」が見られたのに対して、中国の各英華、華英辞書に「経験」が現れるのはもう20世紀を過ぎた。更に氏は、「経験」を訳語として「実質的に決定したのは、西周である」と主張する。

また、松本(2000)は、「経験」と「実験」、「試験」の明治期における意味用法、特にそれらの訳語としての使用実態を検討した。「経験」は最初、日本語において「薬をためす」、「薬の効き目」に関わるものが圧倒的に多く、名詞ではなく「サ変としての用い方を想像させるものばかりである」と指摘した。更に「漢籍にはその用例が見られない」とした。そして明治の始めの頃には「経験」の意味用法が「実験」や「試験」と重なり合う部分もあったが、明治十年代から、特に二十年代を過ぎたあたりから現代日本語とほぼ同じ用い方に整備されたという。松本(2000)は古田(1968)の結論を受け継いだ。従来の研究より多くの用例を出しながら考察を行った。そのほか、惣郷・飛田(1986)は『明治のことば辞典』で明治期の辞書を調査して、そこに現れる「経験」の用例を並べ出した。

上述のように、「経験」の意味用法、またその初出と意味変化について論じた研究は見られているが、明治期あるいは訳語としての「経験」だけに注目しているものがほとんどであり、中国語との相互影響も加えて、意味変化の全体の流れについてはまだ考察されていない。本論文は各先行研究を踏まえて、まず「経験」は漢籍に存在するかを確認し、存在すれば、いかなる意味用法で用いられているかを調査する。その上、日中両語間の相互影響の視点から、両語におけるその語義的変容の流れを描くことを目的にする。

### 3. 「経験」の語義的変容

中国の古典籍にその用例が見られなかったと言われる「経験」は実際に中国語資料に数多く現れている。日中両語において「経験」はいかなる意味から、どのような過程を経て現在の意味に至ったのか、その経緯を明らかにするため、漢籍に見られる用例までさかのぼる必要がある。

筆者のみるところによれば、時期的に外れているが、日中両語のどちらにおいても、「経験」の語義変化に連続的、逐次的といった特徴が窺える。即ち、新しい意味と古い意味と必ず強く関連しており、古い意味が消滅してから新しい意味が生み出されるわけではなく、古いのが用いられつつ、新しいのも相次いで現れてくる。

---

<sup>6</sup> 佩文韻府(はいぶんいんぷ)は、1711(康熙50)年に成立した、中国清代の蔡升元らが康熙帝の勅を奉じて編纂した韻書、つまり漢字を韻によって分類した書物である。元来は韻文を作る際に押韻可能な字を調べるためのものだが、分類が細かく、更に字義も記されているので、字書のような役割も果たした。

以上を意識しながら、第3章では、中国語と日本語と二部に分けて、「経験」の語義的変容の過程を描く。また日中両語間にいかなる交流ないし相互影響があるのかを考察に加える。

なお、以後挙例に際しては原文に句読点の挿入を中心とする調整を施す場合がある。漢字の字体は現代日本のそれに統一する。原文における仮名の濁点の有無の不統一は非常に多いので、「(ママ)」の表示を省く。()に入れて示した振り仮名や注釈、訳文は筆者の追加による。用例の年は、それが執筆された年の分かる場合は執筆年、分からない場合は刊行年、不詳の場合は著者の生年によって認定する。

### 3.1 中国語における「経験」の語義的変容

本節では「経験」の初出時期から19世紀末期までの中国語における語義的変容を見ていきたい。

なお、本節で取り上げる「経験」の用例は、現在のその意味と関連すると思われるものに限る。しかも仏教用語ではないものとする。対象外の例として「按経験緯」<sup>7</sup>、「未經験明」<sup>8</sup>など、即ち“○経/験○”の形になるものが挙げられる。一方仏教に関わる文章においての「経験」は、「経変」(「変相」ともいう)<sup>9</sup>と同じ意味だと考えられ、ここの「経」を金剛経など、具体的な経文に解釈したほうが自然なので、考察対象から省いた。

#### 3.1.1 「経験」の初出と原義

字面からみると、「経験」は“経過/通過する、経る”を表す動詞「経」と“検証(する)”を意味する名詞「験」(動詞でもある)から成り、中国語の文法に従って、これを素直に捉えれば「経験」の意味は“検証を経た”になる。後述になるが、実際の用例によると、「経験」の原義は“検証(験)を経た”であるのは確かである。

こういった解釈でいけば、「経験」は語としてのまとまりを成さない単なる2字の接続の可能性はある。広く知られている通り、古典中国語には単音節の語がほとんどであった。故にいわゆる二文字で一つの概念を表す“二字漢語”は滅多になかった。これを踏まえて見ると確かに「経験」を一つの“単語”だと言いきく。しかし、“経る”と“検証”を表す語は他にも多くある中、定着されて頻繁に用いられていた組み合わせは調べた限り「経験」のみになっている。また、原義である“検証を経た”は長時間に亘って使われ続け、その後の新義とも強く関わっている。以上の2点で、“検証を経た”を表す「経験」を考察対象と見なす。

<sup>7</sup>この「経」は“経書”つまり『詩』『書』『礼』『楽』『易』『春秋』『孝経』など、経典とされるものを指す。それに対して、「緯」は“緯書”つまり儒家の経書を神秘主義的に解釈し、宗教化した書物群を指す。従ってこの例は、“経書を照らして(按経)/緯書を考察する(験緯)”の意味になり、「経験」は一語ではない。

<sup>8</sup>「未經/験明」は、“検証し明らかにすること(験明)は“未だに経ていない”(未經)という意味で、前例と同じく「経験」は一語になっていない。

<sup>9</sup>変相: 経典の内容を絵解きし、絵画や浮彫、立体造形などで表現したもの。単に変、経変ともいう。文字で表された経説を、相を変じて視覚的に表すことからこの名がある。ウェブ版浄土宗大辞典により。  
<http://jodoshuzensho.jp/daijiten/index.php/変相> (最後アクセス 2018/12/10)

さて、「経験」は初期において、具体的にどのような文脈で用いられるのかを紹介する。中国語資料における初出例は『漢語大詞典』にも取り上げられている以下のものである。

高平郗超，字嘉賓，年二十余，得重病。廬江杜不愆，少就外祖郭璞学易卜，頗有經驗。（中略）超嘆息曰：“管、郭之奇，何以尚此！”超病逾年乃起，至四十，卒於中書郎。  
（高平には郗超という人がいて、その字は嘉賓である。二十歳過ぎの頃に重病を患った。廬江の杜不愆は小さい頃から外祖父の郭璞に占いを学び、検証を経た（的中する）ことが多くあった。……郗超は嘆息して「偉材だと言われている管輅、郭璞であっても、その右に出る者がいないだろう」と言った。郗超の病はその翌年に治って、四十歳にして中書郎の位で死んだ。）

とうせん そうじんこう き  
（陶潜『搜神後記』、5世紀）

この例において、重病を罹った郗超に杜は占いをを行い、結果として杜の予言は全部的中したという前後文脈から推定するには、ここの「経験」を原義の“検証を経た”に解釈することが自然だと考えられる。この例も含め本論文でいう“検証を経た”は、検証を受けてきちんと通過した、つまり正しいと証明されたことをいう。占いにおいて「頗有経験」という、予言は“正しいと証明された（的中する）ことがかなり多い”ことになる。

この「経験」は現代語と同じく“実際に見たり、聞いたり、行なったりすること。またそれによって得た知識や技能”を表す名詞だかのように感じられるとすれば、それは現代語の「経験」の存在と意味用法によって引き起こされる錯覚であろう。この解釈を“（杜は小さい頃から占いを学び）かなり経験がある”にしても、文脈に対照して特に不審なものではないが、その以降の用例から見ると、この例を現代語の「経験」と同一視できる証拠が極めて乏しいと思われる。

此方（好斑猫という方剂<sup>10</sup>：筆者注）累試經驗、今附於此。

（この方剂は何度も試みられて検証を経た、今ここに添付する。）

（齊徳之<sup>せいとくし</sup>『外科精義』、1335（至元元）年）

右新瓦土焙乾為末、用虎目樹皮向南者濃煎汁調。只一服。經驗如神。

（右のものを焙じて乾かして、粉にしてから、南に向かう虎目樹の皮を用いて濃く煎じて調合する。一服だけでいい。検証を経て（効用は）神の如し。）

（危亦林編<sup>きえきりん</sup>『世医得効方』、1337（至元3）年）

6世紀以来のほとんどの用例は医学書（特に方書）に見られ、上の2例のような、ある方剂の効果を説明する文に現れるものは、原義の“検証を経た”を踏襲している。具体的な文脈に置いてみると、方剂が検証を受けて効果があると意味する。この2例（特に「経験如神」）の「経験」を“効果”を

<sup>10</sup> 本論文で「方剂」を“調合した薬剤”の意味で用いる。例えば、「葛根湯」は一つの方剂である。

表す名詞だと言っても、一見合理的であるが、ほぼ同時代同文脈に見られた「悉已經験」<sup>11</sup>(全部すでに検証を経た)、「経験神効」<sup>12</sup>(検証を経て優れた効果がある)などの例を加えて考えれば、その意味は“効果”の一語に収められない。

また、最も多く見られた用例は、次のような複合語的なものである。

廻瘡蟾蜍錠子、陝西薬局提挙馬雲卿親伝経験方。

(廻瘡蟾蜍錠子、陝西薬局の提挙の馬雲卿に教えられた検証を経た方劑だ。)

(齊徳之『外科精義』、1335(至元元)年)

後接要素として多く見られるのは「(之)方、良方、奇方」など、“方劑”を表すもの以外に、「洗肝散、秘真丹、猪肚丸」などの具体的な方劑の名前、「(之)薬」「者」などカテゴリーを指すものもある。また、「経験方」「経験良方」は医学書の書名としても数多く用いられている。

意味上、占いが検証を経た場合、“的中する”といい、方劑の場合になると、“効き目がある”というので、「経験方」で“よく効く方劑”を表現しているように見える。しかし、「経験良方」など「方」の前にすでに効果を評価する修飾語「良」、「奇」などが入っている例も多く見られ、“効き目がある”と“良い”の同じ意味を2度言う必要性があるかについて甚だ疑問である。従って「経験」が本当に“効き目がある”との解釈でいいかは、まだ議論の余地が残されている。

そのほか、「経験秘真丹」の場合でも、“検証を経て(効果がある)秘真丹”といっても意味上無理ではないが、同じ資料においても、方劑名の前に「経験」が付けられているものと無いものもあり、意図的に区別されている。その区別は勿論、「経験」であるかどうかになる。「経験」を原義で解釈すると、それがつけられていない方劑は“検証を経ていない/効果が優れていない”と言えるはずだが、このような方劑を方書にたくさん載せることが非常識であるため、原義のまま説明しにくいと考えられる。この「経験」の意味については次の小節に詳述する。

「経験」の“検証を経た”という意味用法は5世紀から19世紀まで使われ続けていた。医学書中の使用が9割以上を占めているが、農業、軍事などの面に使われるのも数例見られた。その意味範囲が“検証を経た”に止まらず、“評価はプラスのだ”と含意するのは普通である。具体例の列挙を末尾の年表に譲る。

### 3.1.2 原義からの拡張

前小節で述べた「経験」の原義から、他の意味用法も複数生み出された。本小節ではその意味の拡張について述べる。

<sup>11</sup> 『瑞竹堂経験方』1326(泰定3)年

<sup>12</sup> 『普濟方』1390(洪武23)年

晩節以方書濟人為事、聞一秘方奇訣、求訪百至、易千金不惜。歳久得益多如煙霞。…奇疾頼公起死者不勝紀例。…当時少傅竇公亦以医方談客、多獵神農經所載為用、公則博採經驗所謂海上方者、録之無遺。二公雖趣向不同、於博施則一也。故竇韓之名並伝於世。

(晩年は方書で人を救うことを事業にする。一つの秘方があると聞くと、何度も訪れてそれを求め、千金で買ってでも惜しまない。時間が経つと手に入れたものは煙霞のように多い。…韓公のお陰で奇病が治った人は数えきれない。…当時の少傅である竇公もよく門客と医方を討論するが、彼は『神農經』に載っているものを多く用いるのに対して、韓公は經驗-いわゆる海上方-を広く採用し、漏れなく記録する。二公は趣味が違うが、親切に施しをするのは同じだ。故に竇韓の名は世に謳われる。)

(王惲『秋澗集』、1227-1304年<sup>13</sup>)

世有奇疾、医經所不備、医流所不識、獨得於神悟理會而著為奇中之方、此其難也。夫人不幸抱奇疾、至於医經不備、医流不識、遂謂無藥可治…

(世に奇病があり、それは医学經典に備えられておらず、各流派に知られていない、それを治す奇方を得るには奥義を悟るしかなく、これはその難しい所である。人が不幸で奇疾を罹ったら、經典に載せられておらず、知られていないので、それを治せる薬が無いと謂う…)

(楊維禎『東維子文集』、1370(洪武3)年以前)

ここの「經驗」は「海上方」を指すことが容易に分かる。「海上方」は「秘方奇訣」のようなもの、「奇疾」を治せる方劑である一方、それを入手しようとするなら“何度も訪れて”なければならないものである。「奇疾」について『東維子文集』の例に説明がある。“医学經典に備えられていない”は、現在でいうと理論的な根拠がないことに等しく、こういった病気は今でいう奇病、難病であろう。また、韓公はこのような「海上方」を集めることに対して、同じく名医である竇公は、医学の經典である『神農經』に載っているものを用いる。従って、医学經典に載せられない「經驗」即ち「海上方」が民間各地にあり、難病も治せる程の効果がある。こういった理論的には証明されにくい、民間で何度も使われ、その効果が評価されて広がられている方劑は「經驗」と呼ばれていたであろう。

これを踏まえて前小節の「經驗秘真丹」も説明できるようになる。医者に処方されたものではなく、經典になる医学書にも載せられていないが、効果がある民間の治療法を、普通の方劑と区別するために「經驗」をつけたと考えられる。

また、以下のような例も見られた。

苗君仲通論著『備急活人方』、会萃諸家所載、祖父所伝、江湖所聞及親所經驗者、筆成一編。…是書一出、備医經之未備、識医流之未識、使天下不幸抱奇疾有对疾之証(ママ)、对証之藥…

<sup>13</sup> 成立年は不詳。乾隆年間に編集された『四庫全書』に見られる。1227～1304年は作者の王惲の生年である。

(苗仲通は、諸家の經典に載っているもの、祖父、父から引き継いだもの、世間で聞いたものと自ら検証したものを集めて、『備急活人方』という一編に書いた。…医学經典に備えられていないものを備え、各流派に知られていないものを知らせているので、この本が出たら、難病を抱えている不幸な人に病状に応じる治療薬を持たせた。)

(楊維禎『東維子文集』、1370(洪武3)年以前)

ここの「経験」は前の「載、伝、聞」と同じく、「所」の直後に来て、名詞構造<sup>14</sup>を構成するものになる。似たような例は「臣師嵩所経験也”、“臣所経験也”などが見られ、年と出典は年表に参照された。

明(1368-1644年)、清(1636-1912年)になると小説をはじめ、様々な文学作品が出てきた。中国古典四大名著の一つとして広く知られる『西遊記』<sup>15</sup>に「経験的好方」や「有何経験」が見られたが、やはり方剂、治療法に関する文脈に置かれ、その意味も元来の意味と変わっていない。しかし、それより遅い時期に成立した『紅樓夢』<sup>16</sup>を確認すれば、以下の用法がある。

那劉姥姥帶著板兒，先來見鳳姉兒，說：“明日一早定要家去了。雖然住了兩三天，日子却不多，把古往今來沒見過的，沒喫過的，沒聽見的都經驗了。”

(劉姥姥は板兒を連れてまず鳳姉兒に会いに来た。そこで彼女がこう言った。「明日の朝早く家に帰らないといけないよ。二、三日しか泊まっていないが、この短い時間で、今まで見たこともない、食べたこともない、聞いたこともないものことを全部経験した。」)

(曹雪芹『紅樓夢』「蘅蕪君蘭言解疑癖 瀟湘子雅謔補餘音」、1740～80年代)

これはもう一つの動詞用法で、日本語に訳すと「経験する」になるが、中国語ではこの「経験」の類義語だとすれば「經歷(する)」<sup>17</sup>になる。色々なことを自分の經歷にしたのは、色々なことを見聞いたことである。更に、この「経験」は、田舎から来たお婆さんの“劉姥姥”の発話にあり、振り返ってみると『西遊記』の中の例も、ほぼ会話文に見られるので、「経験」は医学用語であるが、その原義も拡張意味も砕けた場面に使われ、日常の生活まで浸透していたと窺える。

また、意味用法に拡張できるのは、すでに述べた古典中国語に単音節語が基本だという性質と関連している。二文字を使うなら、この二語の文法関係は違うパターンになる可能性がある。述語—目的語構造で解釈されると、“検証を経た”となり、認識による分析によって“効果がある”という意味が生み出され、文脈によって更に条件—“医者による理論的なものではなく、民間で”—が付け加わると、“民間による難病を治す秘法”に至る。また、並列構造で解釈されると、“經歷して検証する”となる。二つの動詞から成った並列構造の中、どちら一方に重点を置くと、そちらの意味が当該

<sup>14</sup> 「載、伝、聞」などだけなら動詞であり、「所載、所伝、所聞」にすれば、“載っているもの、伝えたもの、聞いたもの”を表す名詞になる。

<sup>15</sup> 成立は16世紀の末期だといわれる。

<sup>16</sup> 『西遊記』と同じく中国古典四大名著の一つである。成立は1740～80年代だといわれる。

<sup>17</sup> 現代日本語で「經歷」はあまり動詞として使われていないが、中国語では名詞でも他動詞でもある。

二字語の意味になる。『東維子文集』の例の場合では重点が「驗」(検証)に置かれ、『紅樓夢』の例の場合では重点が「経」(経歴)に移っている。以上で述べた過程を図にまとめて示すと、図1になる。

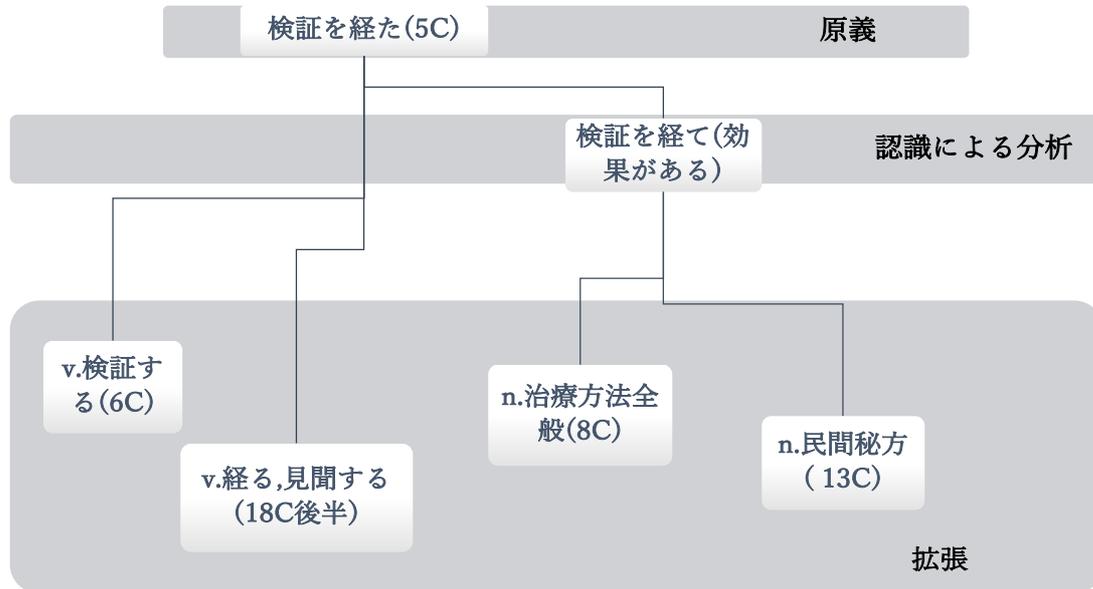


図1.中国語における「経験」の語義変容(19世紀末期以前)

このように、中国語において「経験」は5世紀から19世紀の末頃まで用いられ続けてきた。しかしその出典に関して、小説、または農業、軍事方面の資料にもわずかな例が見られたが、絶大多數は医学関係のものから離れていなかった。従って、その意味範囲も医学という枠に限られ、独立した名詞、動詞としての用法は現れたが、現代語の“experience”という概念まで至らなかった。

### 3.2 日本語における「経験」の語義的変容

#### 3.2.1 日本語での初出とその意味

漢文中の使用になっているが、日本では江戸時代になって初めて、医学専門用語である「経験」の用例が見られた<sup>18</sup>。日本人による「経験」の初出例が見られたのは、1632(寛永9)年のことだった。その例文を挙げると以下になる。

言南方而経験薬北方而難用薬有之。又北国而経験方南国而難用方有之。…今此大成方南北而経験薬也。故薬不取一変南北共用此方可治療也。

経験 南北ニテ験シヲヘタルト云義也。経、歴也。験、効也、証也。医書大全ニ宗立自序曰:医善専門、方貴経験云云。…又謂之大成是皆経歴効験、有不待試而百発百中者、誠衛生之捷徑也。

<sup>18</sup> (明)黄廉述、江戸写『秘伝経験痘疹治方』、年は1000~1299年だと推定される。

(南では効果のある薬なのに北では効果のない薬になるものがあり、また北では効果のある方剤なのに南では効果のない方剤になるものもある。…この大成に挙げているのは、南北のどちらにおいても効果のある薬である。故に、薬を変えなく、南でも北でもこれらの方を使えば治療できる。

経験 南と北において験を経たという意味である。経は、歴の意味である。験は、効果、検証の意味である。宗立は『医書大全』<sup>19</sup>の自序で、「医学なら専攻のあった方が善く、方剤なら検証を経た方が有難い」などといった。…またこれを大成と呼ぶのは、皆検証を経たからであり、改めて試みなくても絶対に効果があるものあれば、誠に治療の近道である。)

(吉田宗恂<sup>そうじゆん</sup>『南北経験医方大成鈔』、1632(寛永9)年)

「経験」という言葉は新出語として詳しい説明がなされ、日本語の解釈中の「験しを経たる」が漢籍の中の“検証を経た”の意味と対応していることは明らかであり、当時の日本でまだ定着しておらず、馴染みのない単語であったからこそ、医学書でその単語自体の意味を説明する必要があったのであろう。漢方医学書によって日本に紹介された「経験」は、最初はその原義をほぼ踏襲したと言ってもいいだろう。とはいえ、日本語における使用は従来のそれと少し異質なところが窺える。

漢籍における「経験」の原義は“検証を経た”であり、“効果がある”というのは、「経験」自身を持っている意味ではなく、読み手である人間の常識などによる分析の結果にすぎない。即ち、ある薬がすでに検証を経たと言われれば、人間は“検証という行為が行われた”以上に、“ある程度効果がある”などのような評価まで理解が深まる。漢籍の用例を解釈する際、“検証を経て(効果がある)”を用いて「経験」を現代語に訳しているが、“効果がある”という部分は、その当時の「経験」が持っている意味とは言いにくい。しかし、日本語のこの初出例を見れば、「験」の意味について、はっきりと「効也、証也」だと、二通り挙げられている。その中の「証」は従来通りの“検証”に当たり、一方「効」は、恐らく“効果/効用”を指すと考えられる。要するに、「経験」の語が江戸時代に日本に渡って来た時、原義であれば人間の分析による意味である「効果がある」は具体的な意味の一つとして明確に提出されていることが分かる。意味の面だけでみると原義とほぼ変わっていないが、このことはその以降の意味拡張に影響を与えたと思われる。

「経験」は、特に中国の医学書を元にして編纂した書物において、暫く上例のようにほぼ原義通りに使われていた(「経験ノ良方」、「経験ノ処」等)が、従来の意味用法と異なるものの方が多く見られている。

### 3.2.2 意味拡張

上述のように、日本語における初出例は既に「経験」に“効果がある”という意味があると提出した。その拡張として、1820年代に「経験」を一つの名詞として“効果”の意味で使われる例が現れた。以下にまず『角川古語大辞典』<sup>20</sup>に挙げられている用例を出す。

<sup>19</sup> (明) 熊宗立著『医書大成』(『各方類証医書大全』、『医方大全』ともいう)、1446(正統11)年成立。

<sup>20</sup> 全5巻、1982~1999年。

凡千七八百帖薬を用ひ、手をかえ品をかえ候て種々療治いたし候得ども、経験うすく、困り果申候。

(およそ千七百帖の薬を用い、手をかえたり品をかえたりして様々な治療をいたしましたが、効果が薄くて困り果てました。)

(曲亭馬琴『曲亭馬琴書簡』、1823(文政6)年)

この「経験うすく」と同じく“効果”の意味で用いられる例は、明治4～5(1871～72)年刊のかな仮名垣魯文の『あぐらなべ安愚楽鍋』に見られる「腎薬もちひた経験(けいげん)」なども挙げられる。一方、調べた限り中国語においてこのような用法はない。これは前小節で述べた、“効果がある”という意味が中国語の原義に含まれていなく、日本で初めて明確に提出されたからだと考えられる。

また、早い時期に書かれた日本語の資料における「経験」の用例であれば、まず次の例が挙げられる。

コノ方モ尚因ガ家方ナリ、経験ハ四編ニ詳ナリ。

(この方も(大橋)尚因の家蔵方であり、“経験”は4編に詳しく述べている。)

(津田玄仙『りょうじきだん療治茶談六』、1795(寛政7)年)

上例において「経験」は明らかに一つの名詞として使われる。「コノ方」というのは、「寒疝小腹痛」を治す「四味茴香散」のことである。ここに方剤の名前だけが出されて、それを調合するのに使う薬材及びその方法は一切言及していないため、「経験」は“医者による処方箋の内容”を意味するのではないかと考えられる。しかし、第4編を確認してみると、「四味茴香散」は一回しか見られず、その前後文脈において薬の調合や服用法などに関する内容は現れていない。第4編は第6編と異なり、処方ではなく病状ごとに書かれ、「淋瀝痔血」の項目に「即作四味茴香散与之卒痛止血淋全癒」があるが、前後文脈で症状や具体的な病例が紹介された。一方、「寒疝急痛」の項目を見れば、「四味茴香散」は全く書かれていないが、他の方剤の調合法に関する説明が付いてある<sup>21</sup>。説明文に薬を飲んだ後の体の反応から、回復状態によって行うべき調整、観察期間(「三四年不発乃却薬也」)、病理などまで紹介された。

以上より、この「経験」の意味は一つの病例に向かって医者が行なったすべてのこと、つまり“(具体的な処方箋の内容も含め)病気に対する観察、治療過程の全般”だと仮定する。

また、同書に以下の例も見られた。

苓朮羌附湯：治寒疝、肚腹疼痛、泄瀉不止、甚則交血利者。茯苓、白朮、羌活、附子、大棗、甘草、右六味水煎。コノ方モ尚因ガ家方ナリ、経験ノコト詳ナレバ爰ニイタサズ。

<sup>21</sup> このように調合法まで書き加えてあるのは第4編において稀なことである。

(苓朮羌附湯:寒疝、腹痛、下痢、血利<sup>22</sup>を治す。茯苓、白朮、羌活、附子、大棗、甘草の6種類を水で煎じる。この方剤は(大橋)尚因の家蔵方であり、“経験”のことは詳らかなのでここでの紹介を省く。)

(津田玄仙『療治茶談六』、1795(寛政7)年)

この例に「苓朮羌附湯」を調合するのに使う6種類の薬材及びその方法を簡単に紹介したが、他人の家蔵方で、具体的に如何なる病人に、如何なる調整を施し、どのようにして治療を行なったかなどについては(その人の記述に)詳しくあるので、ここでは省略する。こういった説明ができるなら、前の名詞「経験」の意味に関する仮説も成立できるだろう。

また『遠西医方名物考』(1822(文政5)年)、『補憾録二卷』(1853(嘉永6)年)に見られる「経験ニ抛テ、先哲ノ経験ニ随ヒ」、「牛痘経験、防御スルノ経験、接痘ヲ行ノ経験、接人痘ノ経験、効ヲ奏スルノ経験、遷延ノ経験」などの例においても、「経験」は現代語でいう“(一般的に)実際に見聞したり、行なったりすること、また、それによって得た知識や技能”と同じとは言いきれない。“見聞したり、行なったりしたこと”の全般を指しているが、それは医学ないし薬学の枠(治療例、治療過程)に限られ、それらの経歴によって得た知識や技能まで含まれていると語る証拠も見出されていない。だが、「経験ヲ累ル」のような現代語にかなり近い表現も出たので、それだけを取り上げて文脈に置いて見よう。

牛痘ニ真偽ノ弁ヲ明ニスヘキコト。其諸書ニ必載テ嘖々タレハ、予カ言ヲ待ツ所ニ非ス。然トモ予経験ヲ累ルノ余、此ニ一説ヲ抱テ、私ニ君子ヲ俟コト久シ、又近頃檜林氏ノ門氏<sup>モニツケ</sup><sup>23</sup>ニ質問スル書ヲ檢スルニ、独牛痘真偽アルコトナキノ説ヲ發シテ、唯其有毒無毒ノ二候アルヲ弁セリ... (牛痘には真偽があり、それを弁別する方法を明らかにすべきだ。従来<sup>の</sup>諸書に必ず載せられ、皆色々な説を論じているので、私が言うのを待つところではない。しかし私は実際に牛痘を罹った患者とたくさん接した結果、ここに一説を抱いている。私は長く君子を待っていて、最近に檜林氏のモニツケに質問する本を確かめたところ、ただ牛痘の真贋があることはないという説を述べて、その有毒か無毒かの区別があることを論じているのみだ。)

(三宅春齡『補憾録二卷』(1853(嘉永6)年)

牛痘の真贋について既に諸書に書かれているが、著者が「経験ヲ累ルノ余」に一説を抱いているという。この「経験」はまず“諸書に載せられている”理論になっているものとは別で、実際に自ら多くの「既痘ノ人」と接し、それらの病例と治療過程を指すと思われる。更に、その実際の“経験”をたくさん集めた結果、著者に牛痘の真贋を弁別する方法が分かるようになり、その方法を一種の知

<sup>22</sup> 『支那中世医学史』によると、隋の『病源候論』に「赤利」が見られ、「腸胃虚弱、為風邪所傷、則挟熱。熱乗於血、血流滲入腹、与利相雜下、故為赤利」と説明されている。また唐初の『集驗方』などを引いて見ると、「血利、赤白利」等類似の病名が挙げられ、日本の方書に「赤利、腹中絞痛、下部疼重」とされているという。

<sup>23</sup> 日本に牛痘苗をもたらし、日本の天然痘の予防に貢献したドイツの医師のオットー・ゴットリーブ・モニツケを指す。彼は1848年7月に鍋島藩医の檜林宗建の息子に接種、善感したことあるという。

識だと考えても良いが、「経験」自体に“見聞による知識”の意味がない。また、この意味用法は定着まで至らず、『西洋事情』(1866(慶応2)年)で福沢諭吉は「経験」を“証拠”の意味で使ったという<sup>24</sup>。

明治に入ると、医学関係のものだけではなく、自然科学(多くは翻訳書)や農業関係の資料における使用例が増えてきた。訳語としての意味用法を次の小節で詳述することにしたので、ここで敢えて比較的遅い農業関係の例を挙げる。

桑ノ代葉経験ノ説：仏国ノ北部ニ住居スル人民等、桑ノ代葉ヲ以テ養蚕センコトヲ發明シ、已ニ其経験ヲ為スコト久シ。然レトモ未ダ其功ヲ顕ハサズ、先薔薇樹莓(左：ロシエールロンス)楓樹(左：エラープル)及ビ玉蜀黍(左：マイー)等ノ諸葉ヲ与ヘ経験セシニ、蚕是ヲ食スル桑葉ニ異ナルコトナシト雖トモ、往々造繭ニ至ラズシテ死スルアリ。

(桑の代葉実験の話：フランスの北部に住んでいる人たちは、桑の代わりに他の葉をもって養蚕することを発見し、すでに長い間その実験をしてきた。しかし未だその実際の効果は世間に知られていない。まず蚕に薔薇樹莓、カエデとトウモロコシなどの葉を与えて試したが、蚕はこれらを食べたら、桑の葉を食べる場合と異なることはなかったが、繭を作るまで生きられず死ぬことが度々ある。)

(永井保興『養蚕適要一』、1877(明治10)年)

この例はフランス北部の人が、蚕の飼養に桑の葉ではなく、他の葉っぱでもよいと気づいて、色々を試みたが、実際の効果はまだ分からないという。「経験ヲ為スコト久シ」から見ると、この「経験」は“試み”の意味で使われ、その動詞用法「経験セシ」は“試みる”という意味になる。第3.1節で二字語に重点が置かれていると述べたが、この「経験」において重点は「験」のほうにあるので、全体的な意味も“検証する、確かめる、試みる”など、“実際に試してみる(実験する<sup>25</sup>)”の意を表すようになっている。

農業関係の文脈において「経験」の使用は、明治10年代から30年代までの、わずか20~30年間しか続けられなかった。また、その意味にも大きな変化が見られなかった。つまり、明治に入ってから「経験」は新たな意味用法で使われ始めた一方、農業関係の使用ならば、「経験」はほぼ“実際に試してみる(試み、実験する)”という意味で解釈される。以下でより遅い時期の用例を挙げる。

(前略)元来蚕児が結繭する為には吐く所の糸縷は気候暑熱なるときは太くして軽く、冷氣なるときは細くして、重きものなるが如し。且又是迄の経験に據れば、夏秋蚕糸は容積多くして量目<sup>26</sup>軽く、春蚕糸は之に反せり。即ち...

<sup>24</sup> 松本(2000)による。例文を挙げると、「メヂカル・ミュヂエムとは、専ら医術に属する博物館にて、人体を解剖して、或いは骸骨を集め、或いは胎子を取り、或いは異病にて死する者あれば、其病の部を切り、経験を遺して後日の為めにす。」(福沢諭吉『西洋事情』初編卷之一、慶応二年刊)になる。

<sup>25</sup> ここでいう「実験」は、現代語における“(自然科学における)実験”と違い、“実際に検証する”の意味とされる。

<sup>26</sup> ルビは原文のままである。

(もともと蚕が繭を作るために吐く糸は天气が暑い時は太くて軽く、一方、天气が寒い時は細くて重いようだ。その上、今までの試しによると、夏秋の糸は容積も多くて重量も軽く、春の糸はそれと相反する。即ち…)

(松永伍作『蚕桑実験説』、1896(明治 29)年)

「是迄の経験に據れば」という表現の形は、現代語でもよく用いられるが、「経験」に「ためし」というルビが振られてあるので、その意味は上の『養蚕適要一』のものと同じく、農業における試し(実験)であることは容易に分かる。また、農業関係だと言っても、「経験」の多くの用例は蚕業に関する資料に集中している傾向が窺える。

### 3.2.3 訳語としての使用

前節では、明治に入ると農業関係の用例よりも早く、翻訳書での用例が増えてきたと述べた。この小節では、自然科学関係の翻訳文脈から入り、哲学関係のものまで確認し、それらに見られる訳語としての「経験」の意味用法を分析していく。

訳語としての意味と大きく関わっているのは、正にその“試み(る)”の意味用法であり、年表を参照すれば分かるように、動詞用法“試みる”の出現は、名詞用法の“試み”より遥かに早い。“検証する、試みる”という動詞用法は 1795 年の『療治茶談』に既に見られたが、同時期の名詞としての使用はまだ医学関係のものに集中して、意味は“効果、治療過程”などであった。

いずれにせよ、ここでまず最初に訳語としての使用と関わっている“試み(る)”の用例を確認しておく。

コノ二人ノ経験ハ予一人ノ経験ニモ非ズ、父玄林ナルモノ金匱ノ説ニヨツテ之ヲ経験アリケルニヨツテ予モ経験ニ及ベルモノナリ。

(この二人に与えた方剂は、私一人の見聞によるものではなく、父親である玄林の蔵書『金匱要略』によって既に検証され、私も実際にそれを検証することになったものだ。)

(津田玄仙『療治茶談六』、1795(寛政 7)年)

上記用例の前文脈には、癩癩を罹った二人の患者がいて、色々な薬を飲んで見たがなかなか効果が出ないので、医者である著者の所まで来た。著者はその二人に大承気湯という方剂を与え、それを飲んで二人とも病状が好転した、とある。このような文脈を受けて出てくるこの例の意味は、この二人に与えた治療法は、著者の今までの見聞によるものではなく、その父玄林の蔵書『金匱要略』の中で既に検証されているもので<sup>27</sup>、著者も実際に検証することになった、と思われる。動詞としての「経験」は「験」、つまり“検証する、試してみる、試みる”の意味で使われる。これは訳語として用いられる「経験」の意味に繋がっている。

<sup>27</sup> 「大承気湯」という方剂は確かに張仲景『金匱要略』(後漢)の中で確認できる。

また、『療治茶談六』において“試みる”という意味で使われた「経験」に自然科学の“実験”の概念が新たに入り込んだことが分かる用例を以下に示す。

コノ時普理斯士<sup>フリーストレイ</sup>28 年四十ニシテ、化学ノ事ハ毫(左:スコシ)モ知ズ、書冊ヲ検索(左:サガ)シタレドモ、ソノ故ヲ解スルコト能ハズ、ココニ於テ、己ノ意ニ従テ粗拙ナル器具ヲ造リ、経験ヲ始タリシガ、珍異ノ徴候(左:シルシ)現レケレバ、益々経験ヲ積み、此ヨリ彼ニ移リ、幾何モノクシテ、気ニ属セル化学ニ精ク通スルニ至リ。

(この時プリーストリーは 42 歳になって、化学のことについて少しも知らず、本を探したがその原因を理解することはできなかった。ここで彼は自分の考えに従って、粗末な器具を作って、実験を始めたが、珍しい現象が現れたので、益々実験を積み、これからその道に移り、幾ばくもなくして彼は気体に関する化学をよく理解できるようになった。)

(中村正直訳『西国立志編 4』、1871(明治 4)年)

この例にある「経験」は、二つとも「experiment」の訳語であり、“(自然科学の)実験”を意味する。「experiment」を説明する需要に応じて、従来の医学書にできなかった“試み”という名詞用法が発動され、それで言う“実験”を解釈するようになった。

『西国立志編』に絞って見ても、「experiment」の訳語として選ばれたのは「経験」だけではない。しかし、以上の分析に基づいて考えると、既に“試みる”の意味で使われてきて、馴染みのある「経験」は他の語(「経試」、「試験」<sup>29</sup>など)より優勢的だと言えるのだろう。その根拠に、1867(慶応 3)年に出版された初版の『和英語林集成』に、「experiment」の項は「kokoro-mi, kei-ken」となり、1872(明治 5)年の再版の同項にも「kei-ken」が現れた。現代語では正確にいうと「experience」の訳語である「経験」は、最初は“実験”の意味で「experiment」の訳語として使われてきたと分かった。

では、「経験」は如何なる経緯で「experience」の訳語として定着したのだろうか。

最も早く「experience」の和訳として「経験」を当てたのは、井上哲次郎の『哲学字彙』(1881(明治 14)年)だと思われる。しかしそれよりもっと早い時期に、「経験」は既に「experience」と関連を付けられていた。例えば、『和英語林集成』の初版(1867(慶応 3)年)に「experienced」が立項され、“慣れた”、“熟した”、“得意”などとされている。言葉を変えると、「experienced」の意味は“繰り返し/時間が経過して熟練、そして上達になる”と言える。

また、「experience」の定訳と「経験」の新義賦与に大きくて実質的な影響を与えたのは西周だったと言われる<sup>30</sup>。特定の個人がある語を新たな意味で偶然に使用することは、その語義変化を決める要因とは言い難いが、西のような有名人の著作における新義の使用は、その新義の定着と伝播

<sup>28</sup> ジョゼフ・プリーストリー (Joseph Priestley)、18 世紀イギリスの自然哲学者、教育者、神学者、非国教徒の聖職者、政治哲学者。気相の酸素の単離に成功したことから一般に酸素の発見者とされている。  
<https://ja.wikipedia.org/wiki/ジョゼフ・プリーストリー>による (最終アクセス 2018/12/13)

<sup>29</sup> 「経試」、「試験」、「実験」など、「経験」と競合していた語の語史を考察しなかったが、辞書類の確認によると、「経験」の方が他の語より早く定着されている。明治期における訳語としての「経験」、「実験」と「試験」の使用実態について、松本(2000)が詳しい。

<sup>30</sup> 安井(1968)による。

に対して積極的な意義を持っていると思われる。従って、ここでは『哲学字彙』以前の西の使用例も以下の用例で確認する。

凡そ学たるものは唯タ道理を書物上にて知るのみにては可ならず。皆実験に入らさるへからず。其実験に二ツあり。Observation(左:実験)、Experience(左:試験)。実験とは現在にして眼のあたり彼より来るものなり。試験とは将来にして己れより穿ち求むるなり。凡そ尋常の学者空理に互るは実際に入らされはなり。学者苟も実際に入るを要すへし。

(そもそも学ぶことはただ道理を書物によって知るだけではならない。皆“実験<sub>(a)</sub>”<sup>31</sup>に入らないと  
ならない。その“実験<sub>(a)</sub>”には二つある。Observation(“実験<sub>(b)</sub>”)とExperience(“試験”)である。  
“実験<sub>(b)</sub>”とは現在において周りの客観世界から来るものである。“試験”とは将来において自ら  
探り求めるものである。大体の普通の学者は空理に行ったのは実際に入らなかったからである。  
学者はまことに実際に入る必要がある。)

又 Empiric と云ふあり。即ち希臘の Εμπειρικος なり。此語古昔は用へすと雖も、近来は學術の中なかるへからさるもの[に]し[て]貴ひ用ゆるなり。こは物をあてはめるといふ字義にして experience と意を同ふし、即ち実事に就て学ぶを云ふなり。かく近来専ら Empiric と云ふを用ゆるも、蓋シ学者徒らに文事等を學術となし、空理に趨るを防ぐ為めなり。

(また Empiric という語があり、即ちギリシャ語の Εμπειρικος である。この語は昔では用いられなかったが、最近では學術の中で欠かせないものとして大事に用いられている。これは物を当て嵌めるといふ字義にして、その意味は experience と同じくし、即ち実事について学ぶことを指すのである。このように最近専ら Empiric という語を用いるのも、正しく学者がひたすら文事などを學術と見なし、空理に陥ることを防ぐためであろう。)

(西周『百学連環』総論、1870(明治3)年)

この文は主に、“空理”に陥るのを防ぐために、学者は“実験(実際)”に入らなければならないと論じている。広義でいう“実験”に二つ意味があり、その内に Observation(実験)-現在に観察して即座に知られる客観的なもの-と Experience(試験)-自分の既存の客観認識に基づいて更に掘り求めること-に区別される。

一方で、同書「Physics 格物学」という節の冒頭、格物学と化学の相違を論じる文脈に以下の用例が見られた。

化学は experience(左:試験) to observation(左:経験)とて、試験を先きにして経験を後ちにす。  
試験とは己れより穿ち求むるを言ひ、経験とは彼れより来るを言ふ。  
格物学は observation to experience とて、化学と反対して経験を先にし、試験を後ちにす。

<sup>31</sup> この“実験”は後文脈に出てくる Observation の訳語としての“実験”と意味範囲が違うので、前者の広義でいう“実験”を“実験<sub>(a)</sub>”、後者の狭義でいうものを“実験<sub>(b)</sub>”に書き分ける。

(化学は experience(試験) to observation(経験)だといひ、“試験”を先にして“経験”を後にする。“試験”は自ら探り求めることといひ、“経験”は客観世界から来るものといひ。  
格物学は observation to experience といひ、化学と反対して“経験”を先にして“試験”を後にする。)

(西周『百学連環』総論、1870(明治3)年)

二つの英単語の意味に関する説明は総論のそれと同じである上に、ここで「experience」の訳語は「試験」のままであるのに対して、「observation」に当たる語は「実験」から「経験」に変化した。

以上2つの例文を合わせて分析すると、「observation」の特徴は“直観的、具体的”な“客観的存在”(「現在にして眼のあたり彼よりくるもの」)である。つまり当時、少なくとも西の認識において、「実験」も「経験」も“直観的、具体的、客観的存在”というニュアンスが出せる。

一方「experience」の特徴として、“主観的な思考や探求によるもの”(「将来にして己れより穿ち求むる」)となる。「経験」の客観的、具体的特性と違い、「experience」は主観的、抽象的である。化学において抽象的な「experience」は具体的な「observation」(「経験」)の起点と方法になり、格物学において「experience」はその目的と結果になる。

以上で述べた二語の関係を意識しながら、現代語の「経験」の意味用法と照らしてみると、“実際に見たり、聞いたり、行なったりすること”はここでの「経験」、「それによって得た知識や技能」は「experience」に当たるのだろう。つまり西は「経験」と「experience」を一つの概念(広義の“実験”)の二分類にして、「経験」は具体的な意味を表し、まだ“experience”の意味範囲と完全に重なってはいなかった。

本節に出てきた「experience」を含め複数の英単語、またその訳語に当たる「経験」「実験」「試験」は、どれも現代のそれと異なっており、西の理解もその前のものと食い違っていると感ぜられるので、ここで上述の内容を整理するため図2にまとめて示す。〔 〕内の意味解釈は筆者の理解によるものである。

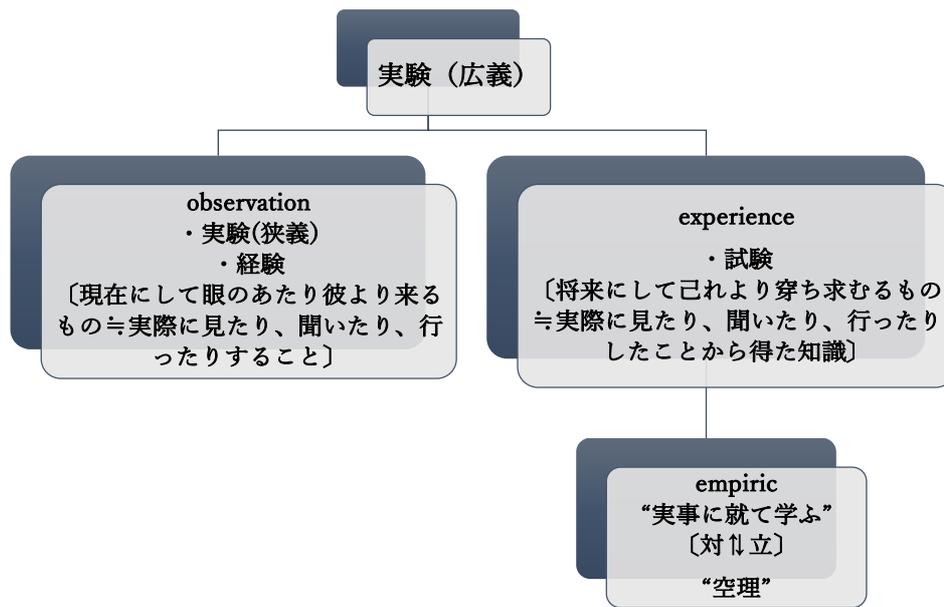


図 2.『百学連環』による「経験」とその関連語

ここまでで、西は『百学連環』において、「経験」を「experience」と直接にリンクさせていないことが明らかである。また、化学と格物学の相違を論じる際、「observation」の訳語として「経験」が選ばれたが、同じ資料に限定しても、訳の選定にまだ大きな揺れが見られる。そして、その四年後の『致知啓蒙(第二巻)』に以下の用例が見出された。

ソハ帰納ノ法ハ、差客ヨリ差主ニ進ミ、特ヨリ全ニ、若クハ特ヨリ特ニ、推ス者ナルニ、老約ノ通理ハ、多少特別ノ経験ヲ集メテ、合セ立タル者ナレハ...皆此帰納ノ法ニ由ル者ニテ、是ソ必ス親シク視察(observation)ノ経、経験上(experimental)ニ本ツキ各自殊別ノ事実ヲ集合シテ、貫通セル一理ヲ得ヘキ切実無ニノ方法ナル。

(帰納法は、特例より定理に進み、特殊より全体に、もしくは特殊より特殊に推察するものであり、大前提の定理は、多少特殊の事実を集めて合わせ立てるものだから...この帰納法によるものであり、これこそ必ず細かい観察を通し、経験上(のもの)に基づいて、各自特殊の事実を集合して、それに貫通する一理を得ることのできる切実で唯一の方法である。)

(西周『致知啓蒙(第二巻)』、1874(明治7)年)

この例は“演繹法”と“帰納法”の説明文に見られる。“演繹法”は一般論やルール(「老約ニテ通理(postulate)ヲ掲ケテス」)に具体的な事項(「差主ヨリ差客ニ涉リ」)を加え、必然な結論(「断言」)を導く思考方法であり、それに対して“帰納法”は、多くの観察事項(「多少特別ノ経験」「殊別ノ事実」)を積み重ね、それらから共通点(「合セ立タル者」,「貫通セル一理」)をまとめることで、結論を引き出す方法である。

従って、ここでいう「特別ノ経験」は「経験上 (experimental) ニ本ツキ各自殊別ノ事実」、つまり“実際の生活の出来事、事実”という意味になり、現代語における「経験」の意味に近づいてきた。しかし、形式上「経験」はまだ「experience」と直接に繋がっていない。

図2を踏まえて、西による“経験”とその関連語、またそれらの訳語の選択を表1にまとめて示す。

表1.『百学連環』『致知啓蒙(第二巻)』における「経験」とその関連語

	百学連環	致知啓蒙2
observation	実験, 経験	視察
experience	試験	なし
experimental	なし	経験上

ここに挙げなかった西のほかの例も含め、筆者の調べた限り、西が「experience」の訳語として「経験」を用いて定着させたことを証明できる例はなかった。だが、「observation、empiric、experimental」など関連のある語を訳して説明しているのは確かに西であると分かる。

前に述べたように、初めて「経験」を「experience」の訳語にしたのは1881(明治14)年の『哲学字彙』である。項目「experience」の訳は「経験、練過」になり、また関連項として「empiricism: 経験論、経験学」、「empirical: 経練律〔論〕、empirical philosophy: 経練哲学」がある。その後の辞書を確認すると、「experience」「empiricism」「empirical」などの語に「経験」ないしそれが含まれる語を当てるのは普通になった。例えば『附音挿図和訳英字彙』(島田豊編訳、1887(明治20)年)には、以下のような項目がある。

- empiric: 経験ヲ主トスル人, 実験家, 自己ノ経験ノミニ據ル人, 庸医〔ヤブイシヤ〕
- empiric, empirical: 経験上ノ, 実験ヲ本トスル, 経歴ニ依レル
- empirically: 経験ニ依リテ, 理ヲ離レテ
- empiricism: 実験家ノ行為, 経験上ノ治療, 庸医ノ治術,〔哲〕経験論
- experience: 経験, 経験スル, 経験シタル
- see: 実験スル, 経験スル
- test: 試験, 経験

意味上「経験」は「実験」「試験」と同じ語の訳語になる<sup>32</sup>のもあるが、「experience」とその関連語の訳語には「練過、経練」などがすでに淘汰され、「経験」(またはそれを含める語)に定着しつつあ

<sup>32</sup> 松本(2000)の結論と合致している。松本(2000)によると、「明治の十年代になり訳語統一の気運が高まっていくなかで、しだいに整備されていく様子がうかがわれる。特に明治の二十年代をすぎると、いぜんとして多義的ではあるけれども「経験」「試験」「実験」に今日と変わらないような使い方をするものもみられるようになっていく」という。

る。また、「empiricism」は「経験上ノ治療」に訳されることから、その語源は医学にあったことが窺われるが、この時期以降、医学上の使用はかなり少なくなってきた。

まとめると、『致知啓蒙』が出版された明治初期までに、「経験」の意味はすでに医学書に用いられる“効き目(がある)”、“検証する(試みる)”、“治療法”などから、“試み”、“実際の観察、事実(実際に見たり、聞いたり、行ったりしたこと)”へ転じてきた。更に哲学における抽象的な意味を獲得し、「experience」の訳語とされたのは、明治十年代を待たなければならなかった。では明治十年代以降において「経験」はまたどのように使われてきたのだろうか。

### 3.2.4 意味定着

明治十年代以降、「経験」は現代語と同じ意味で定着され、特に論理学や哲学関係のものに数多く見られている。この小節ではいくつか用例をあげて、「経験」の意味定着を確認していく。

然れども斯ク推定シタル真事中ニハ、吾人曾テ其何ノ理由アリテ然ルヤヲ見ル能ハザル者有リ。斯ノ如キ真事ヲ経験真事(左:エムピリカル、トウース)、又経験定綱ト云フ…  
(しかしこのように真だと推定している物事の中には、我々がそれまでいかなる理由でそうだったかを見ることのできないものが有る。このような真である事を「経験真事」、または「経験定綱」という…)

経験知識ハ有用ハ固ヨリ有用ナリト雖、理由明白ナル知識ノ貴重ナルハ更ニ之ガ比ニ非ラザルナリ。熱湯ヲ硝子器ニ注入スレバ、忽チ破裂スルコトハ人常ニ経験ニ由リテ知レル…  
(経験による知識は有用だと言えは有用だが、理由が明らかである知識の貴重さと比べ物にならない。熱湯をガラスの容器に注ぐと、すぐにガラス容器が破裂してしまうことは、皆経験によって知っている…)

例ヘバケプレル<sup>第十三編ヲ見ヨ</sup>ハ遊星ノ動行ヲ観測シ、帰納推理法ニ由リテ其定則ヲ発見シタリ、然レトモ是レハ唯経験知識ナリ。ニウトンハ更ニ之レヲ推究シ、帰納及演繹推理ノ二法ヲ用キテ、遂ニ万物引牽ノ定綱ヲ発見シタリ。  
(例えばケプレルは惑星の軌道を観測して、帰納推理法によってその規律を発見したが、これは経験を唯一の根拠にして得た知識である。ニュートンは更にこれを推究して、帰納、演繹推理と二つの用法を用いて、ついに万有引力の定理を発見した。)

(菊池大麓『論理略説』、1882(明治15)年)

「経験真事」などにある「経験」はいわゆる「理論」と相反する意味を表しており、「理由明白ナル知識」はないが観測あるいは他の方法より得た真である知識-例えば熱湯を薄いガラス瓶に入れば、瓶が破裂する-を表している。

また、「人常ニ経験ニ由リテ知レル」にある「経験」は、現代語のそれと同じく、“見たり、聞いたり、行なったりすること、またそれによって得た知識”を指すのだろう。日常ではよく見たり、聞いたり、あ

るいは自らしたりすることは“熱湯をガラス容器に注ぐ”ことで、そこから得た知識は“熱湯をガラス容器に注ぐと、容器が破裂する”ということである。このような「経験」の定義は「五感ノ作用ニ由リテ自然ノ理ヲ探求スル」ことだとされる<sup>33</sup>。

『政談學術演説討論種本』にも、以上の例と同じ用法が見られた。

(前略) 経験学ハ読書学ヨリ其功大ナリ...夫レ理ヲ期セザル淫事ニ於テスラ経験ノ功ヤ斯ノ如ク大ナリ、況ンヤ真理ヲ期シテ、其経験ヲ積ム者ニ於テフヤ、十年ノ後何事カ成ラザランヤ。

(経験学は読書学よりその効用が大きい...そもそも理の期さないでたらめなことにおいてすら、経験の効用はこのように大きい。まして真理を期して経験を積む者においてなおさら経験の効用が大きい。十年後に何の事でも成せるだろう。)

(杉山藤治郎『政談學術演説討論種本』、1883(明治16)年)

この「経験学」は、『哲学字彙』における「empiricism」や、現在の哲学または心理学における「経験論/主義」の概念に近い<sup>34</sup>。この例において、それは「読書学」と対立する概念とされたが、読書による知識は理論知識(西における「空理」)である。

各分野において、他にも現代語の意味用法と同じになっている「経験」の用例があるが、ここには挙げず、末尾の年表に譲る。

### 3.2.5 まとめ

上述に基づいて、日本語における「経験」の意味変化の流れを、図3にまとめた<sup>35</sup>。図の中の表示を簡潔にするため、現代語における「経験」の意味用法に番号を振って、その番号のみ記入する。

I-① 実際に見たり、聞いたり、行なったりすること。

I-② それ(I-①)によって得た知識や技能。

II 実験。

III (哲学) 感覚や知覚を介して実際に生じた主観的状态や意識内容。

<sup>33</sup> 鮫島晋『小学物理教授本(上)』、1885(明治18)年による。

<sup>34</sup> 現在の「empiricism」について、スタンフォード哲学百科事典に「We have no source of knowledge in S or for the concepts we use in S other than sense experience...Sense experience is our only source of ideas.」という説明がある。つまり、感性的な経験は、人間の特定の対象分野Sにある知識、またSで使われている概念の唯一の源だという。しかし用例は、理論(演繹法、読書など)に由来する知識を否定していないため、「同じ」ではなく「近い」にした。<https://plato.stanford.edu/entries/rationalism-empiricism/#Rati>に参照(最終アクセス2018/12/19)

<sup>35</sup> 図2では、「経験」の主要な意味用法のみ取り出して表示し、語義変容にあまり影響を及んでいない、または早く淘汰された意味を省けている。また、図は段階型に見えるが、第3章の最初に述べたように、「経験」の語義変容は連続的、逐次的であり、哲学での意味が現れた時期においても、従来の意味での用例も見られる。

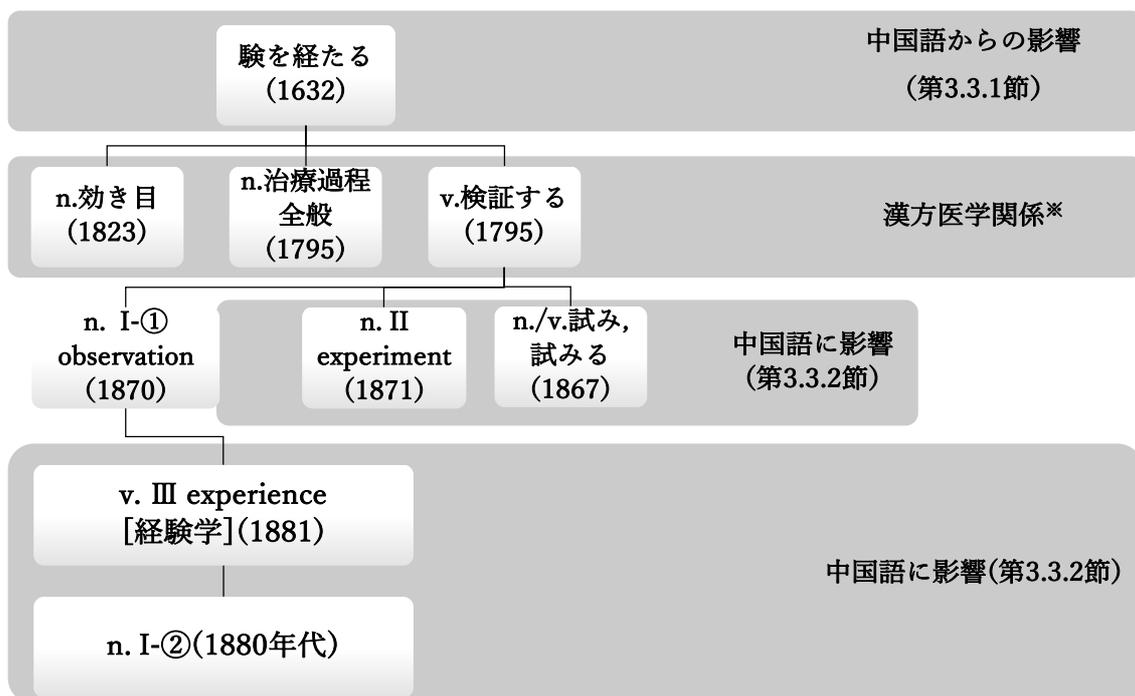


図 3.日本語における「経験」の語義変容

(※本論文の調査によれば、「経験」の語は、1860年代から漢方医学関係の資料から解放され、ほかの分野の文脈にも見られるようになった。)

### 3.3 日中両語間の相互影響

#### 3.3.1 中国から日本への伝播

日本語資料における初出例である『南北経験医方大成鈔』の初頭の文を第 3.2.1 節で引用し、それは中国の医学書の『医書大全』によるものであることが分かった。また、元来の意味に変容が見られ始めているが、19 世紀の半ばまでの使用はほぼ医学関係のものに限られていることも年表から窺える。第 3.1 節で挙げた用例も合わせて考えると、「経験」は5世紀から主に医学関係の資料に用いられる中国語の在来語であり、医学用語として日本に渡り、使われ始めたことに疑念の余地はないだろう。

だが、日本では中国から「経験」を輸入してから程なくして—19 世紀の 60 年代に—それは医学用語という枠から段々と解放されてきたと言える。一方、中国では 19 世紀末期まで医学関係の資料での使用が大多数であり、そうではないものにも質的な意味の変化は見られなく、抽象的な意味などを獲得することももちろんなかった。

従って、「経験」の語史において、最初は中国から日本へとってはいるが、「経験」の語義変容への中国語の関与はその段階までだった。その後、偶然に元来の意味で使われている例も見られるが、医学用語から普通語、特に哲学用語になるという主な意味変化の流れは日本における独自の発展によるものである。

### 3.3.2 日本から中国への逆輸入

既に述べたように、意味用法は多少変わっていたが、中国では 19 世紀の末期まで「経験」は医学関係の資料に用いられるのが主流であった。年表からも確かめられるが、19 世紀の最後から、特に 20 世紀に入ると、「経験」は医学関係に限らず、新聞から官僚の文集、辞書に亘って頻繁に見られるようになる。また、その意味も古くから中国語に有する意味から現代語の意味に一変した。

一般的に自国語における語義の変容及びその新しい意味用法の浸透と普及には、従来の意味用法との関連性、社会的な条件・需要、そして時間が必要だと思われる。例えば、日本語で「経験」が“(自然科学の)実験”の意味になるのは、「経験」は従来から“試みる”という、実際に試してみることを表す意味があり、また洋書翻訳ブームに大量の用語の和訳を決める必要があり、更に、原義からその意味に到るまでに 200 年以上も経過した。これらの要因により、日本では自国語における語義の変容及びその新しい意味用法の浸透と普及をもたらした。しかし、19 世紀末期から中国語における「経験」の語義変容は、従来の意味用法との関連性が薄く、その経過が見られない程の急変とも言える。またその社会的背景として、日清戦争(1894～1895 年)の後に現れた大量の日本語語彙(特に近代概念を表す語)が中国へ伝播され、これが中国語に大きな影響を与えた可能性がある。

前章の内容も加味し、19 世紀末期～20 世紀初頭に、中国語の資料に見られる「経験」の意味変化は日本語の影響を受けた結果だという仮説を立てる。本小節では、具体例を挙げて考察して、この仮説が成立する可能性を論じる。

まず、中国語資料に見られた用例を次に挙げる。

(前略)鉄甲高於水面曰陸砲台、低於水面曰水砲台。又活砲座曰鉄甲転台、以汽機行之曰鉄甲浮砲台。然使船多十五倍則蹙、砲台至無以回、此非臆説也。比之求野庶免向壁歟、述砲台経験説。...仮如砲台可撃鉄甲船一千七百六十碼、以円之半為界、敵船必行円径為三千五百二十碼...

(鉄甲が水面より高いものを陸砲台といい、水面以下のものを水砲台という。また砲台の座が固定されていないものは鉄甲転台、蒸気機によって動かせるものは鉄甲浮砲台という。しかし船は現在の 15 倍の数になるなら狭苦しくなり、砲台が回られないことに至る。これは根拠のない臆断ではない。それを実践に持ち込み、砲台実験の話を述べる。...もし砲台が半径千七百六十碼の範囲の鉄甲船を撃沈できるとすると、敵船が直径三千五百二十碼の範囲に来ないと成らない...)

(陳忠倚『皇朝經世文三編』卷五十八、傳雲龍「美利加砲台経験説」、1897(光緒 23)年)

19 世紀末期の軍事関係の文脈において、上例のような外国の先進的な武器や設備を紹介するものが複数である。その使い方や性能を説明するには、外国の実験の過程や結果、または自分が行った実験や推算を加える。

しかし、全体的に、中国語の資料において「経験」を“実験”の意味で用いる例が少なく、「経験」と「説」の共起に至ったらあまり見られていない。つまり上例の意味も用法(語の構成)も従来のもの

と異なっていると言える。一方、日本語の資料において 19 世紀の前期にすでに「経験説」という形が現れ、最初は医学関係だけでの使用だが、1870 年代に入ると農業関係に多用され、その意味も“試み(る)”、“実験”などで説明できることは注目を引く。さて、19 世紀末に中国語資料に見られるこの意味用法には、日本語の影響があるのだろう。

作者である傅雲龍は、「中国人による日本研究の質的進歩」のシンボルだと言われる『遊歴日本図説』を著した清の官僚で、1887(光緒 13)年～1889(光緒 15)年、出国遊歴官員の一人としての日本を含め多くの国を遊歴した。彼は日本で各領域の資料を収集し、実地見学や各業界の日本人との交流などを通して、文献の内容を確かめたといわれる<sup>36</sup>。また、『遊歴日本図説』の特徴として、日本の文字、語彙についての紹介も見られ、中日語彙読音対照表まで加えられている。従って、傅雲龍は大量の文献(勿論農業関係の文献も含まれている)に触れ、ある程度日本語が分かると推測できる。この「経験説」は日本語からのものだと直接に証明できる例は見られなかったが、日本語の知識を持っている傅雲龍は日本語から覚えた「経験説」を利用した可能性が十分ある。

上の例と違い、日本語の関連を明確に見せているのは、次の「日本農政維新記」の例である。

先是青森県遭虫害、勸農局徵求驅除之策、掲之各日報。至是東京府民渡辺藤十郎等数十人、前後各報経験之説、改新潟樹術場為農事試験場、農学教場、募集生徒授業。  
(青森県が虫害に遭って、勸農局は虫害を駆除する方法を広く求め、それを各日報に掲載した。この時また東京府民の渡辺藤十郎など数十人が、相次いで実験の話を報告して、新潟県の樹術場を農事試験場、農学教場に改めて、生徒を募集して授業を行った。)

(甘韓『皇朝経世文新編続集』卷七下「日本農政維新記」、1902(光緒 28)年)

日本の農政維新を紹介する上例に現れた「経験之説」は、日本語資料の中、特に農業関係の資料にも数多く見られている。例えば、3.2.2 に「桑の代葉経験ノ説」-日本の農民がフランスを見習い、蚕に桑の葉ではなく、ほかの葉を与える実験をした話-が例として挙げられた。この文脈での「経験之説」は、日本語の「経験ノ説」をそのまま書き写したものと考えられ、その意味も“(農業の)実験の話”にした。

中国が日本の農政維新や農業技術の改革を国内に紹介、模倣するのは 19 世紀末葉からすでに始まっていた。その背景として、19 世紀に日本が蚕業学校を設立し専門的な人材を育成する、また蚕種とその管理法を改良することを通して、生産量を大きく増やし、経済の発展を支えたことが挙げられる。その成果を見た中国はその最初の農業学校と言われる“蚕学館”を設立し、蚕業の改革を始めた。蔣(2011)は、その改革の内容を“留学生の派遣”、“日本人教習の招聘”、“蚕業文献の翻訳”と“蚕業区での実践”と、四部分に分けている。“蚕学館”の創立後に間もなく、稽侃<sup>37</sup>が留学生として東京高等蚕業学院(東京農工大学)に派遣された。20 世紀に入ると、日本への留学ブームがわきおこり、1908 年までに日本で農学を専攻する中国人留学生は 300 名以上にのぼ

<sup>36</sup> 王(1998)による。

<sup>37</sup> 稽侃(けいかん)、中国の一人目の官派(公費)留学生だといひ、蚕業教育家である。

ったという。また、“蚕学館”は“先行して日本の蚕業書を翻訳し、出版して広く伝播させる”<sup>38</sup>ことを事業の一つにし、農学書の翻訳<sup>39</sup>に力を入れた。それによって“蚕学館”が開館する際、日本人の先生<sup>40</sup>を招き、日本の蚕業文献の翻訳を中心とする翻訳活動も始めた。その努力の結晶として中国初の農業学術刊行物『農学報』<sup>41</sup>が創刊され、それに発表されたものは『農学叢書』に編集された。その中の多くの文章は上海農学会の翻訳者の藤田豊八によるものである。銭(1997)と李(2012)に提示されている藤田の訳著目録によると、タイトルには「下痢」など明らかに日本語の語彙であるようなものが見られるように、中には日本語の原版の書名をそのまま中国の漢字に書き写したのも含まれている。本論文に用例として挙げた松永伍作の『蚕桑実験説』(「是迄の経験に據れば...」)も藤田によって翻訳され、『農学報』また『農学叢書』に載せられた。

このような農学資料の翻訳につれて、“試み、実験”を意味する「経験」は中国に渡っていったと考えられる。更に、筆者の調査によると中国語の資料において「経験」が“実験”の意味で使用されるのは、19世紀末～20世紀初頭の軍事関係(武器)と農業(蚕業)関係の文脈に限られている。これは、日本語でこの意味用法が主に1870～90年代に農学資料に用いられることと合致し、以上の推定を裏付けるものとなっている。

ここまで述べたように、日本語の影響を受けて、中国語の資料において「経験」は瞬く間に“実験”の意味で使われるようになった。それ以降のものは抽象的な意味を獲得し、現代語の意味に転じた。

(前略)即在熱心弁事之人、或操之太蹙而適以債事。猶御馬者不察馬力之幾何、徒作一日千里之想、卒至不及五十里或百里而止。此則在乎弁事之有經驗、已非儻談學理者所能喻。  
(熱心に仕事をする人は、時には急ぎすぎて逆に事を仕損じてしまう。馬を駕御する者は馬の力を知らないように、徒らに一日千里を行くことのみを考え、結局五十里あるいは百里も及ばずに止まってしまう。これは經驗があるかどうかにより、すでに理論だけを話す者が理解できることではなくなる。)

(「張殿撰復甯学務処沈觀察函 代論」『申報』、1906年4月11日)  
既得經驗之豐富、觀察之精細、即可識物境善惡之狀況、啓發自己取捨之能力...

(既に豊富な經驗、細かい觀察を得たら、物事の善惡狀況を弁別でき、自分の取捨能力を啓發する...)

(「旅行之目的」『申報』、1907年7月19日)

<sup>38</sup> 原文「先行翻譯日本蚕書圖說，成書後廣為傳播」。「設立養蚕学堂章程」『集成報』第19冊、1897年10月30日。

<sup>39</sup> 日本のものを中心にして翻訳活動を行なっているが、西洋のものも見られる。(蚕学館によれば)その比率は7.6:1だという。

<sup>40</sup> 初期の日本人“教習”として、轟木長、前島次郎、西原徳太郎などの名が挙げられる。

<sup>41</sup> 1897(光緒23)年4月創刊、10年間に外国の農業関係の文章を700件以上翻訳し、発表した。

「僅談学理」(理論だけを話す)ではなく、仕事をするに対して大事なものは「経験」があるか否かであるという。また、下の例に「経験」は「観察」と区別され、具体的“実際に見たり、聞いたり、行なったりすること”以外に、“それによって得た知識や技能”の抽象的な意味まで獲得している。

前者の“実際に見たり、聞いたり、行なったりすること”、つまり“実際に見聞すること”の意味用法は、両国どちらにも従来の用例が見られている<sup>42</sup>。更に後者の抽象的な意味の獲得は、上の図3から窺えるように、日本語の場合は哲学での使用からだと言える。一方中国語では、19世紀末までは医学以外の文脈が少なく、「経験」の抽象的な意味も見られなかった。それにも関わらず、1905年以降、この意味用法は一般大衆向けの新聞紙『申報』でたくさん利用されている。更に1908(光緒34)年の『顔惠慶英華大辞典』「経験」や「経験論」は experience、empiricism などの訳語として取り上げられている。この抽象的な意味も日本語からの影響を受けた結果だとすれば、それを中国語に逆輸入した時期は、19世紀末、遅くも20世紀の初頭と推定できる。以下では、19世紀末～20世紀初頭に日本から中国に渡った資料(特に哲学関係のもの)において、「経験」の用例があるか、またある場合、それはどのように中国語に受け入れられたかを検討する。

譚(1980)は、1660～1978年の間に中国語に翻訳された日本書を以下のようにまとめた<sup>43</sup>。

表 2. 中国語に翻訳された日本書の統計(1660～1978年)

	0 総類	1 哲学 <sup>44</sup>	2 宗教	3 自然科学	4 応用科学	5 社会科学	6 中国史地	7 世界史地	8 語文	9 美術	合計
1660-1867	0	0	0	0	2	0	0	0	2	0	4
1868-1895	1	0	1	0	2	1	0	2	1	0	8
1896-1911	8	32	6	83	89	366	63	175	133	3	958
1912-1937	20	62	19	249	243	660	86	75	312	33	1759
1938-1945	2	3	1	23	18	42	8	9	32	2	140
1946-1978	34	159	95	227	1051	459	51	122	535	163	2896
合計	65	256	122	582	1405	1528	208	383	1015	201	5765
比率(%)	1.13	4.44	2.12	10.09	24.37	26.50	3.61	6.64	17.61	3.49	100.00

表2から分かるように、中国が日本の哲学書を翻訳し始めたのは、日清戦争(1894～1895年)の直後であり、そこから1978年まで翻訳書数が増え続けている<sup>45</sup>。また、ここでいう“日本書”は日本語で書かれている書物のことを指す。つまり、原著は日、中以外の言語であるが、まず日本語に

<sup>42</sup> 中国語においては“見聞する”という動詞的な用法があるが、それと対応する名詞用法が見られていない。

<sup>43</sup> 原表は譚(1980) p41 表二「中訳日文書統計表(1660-1978)」である。表2は筆者が譚(1980)のデータを利用し、必要のない項目を減らして整理したものである。

<sup>44</sup> “哲学”の項目は更に哲学総論、思想、中国哲学、東方哲学、西洋哲学、論理学、形而上学、心理学、美学、人倫学と、10の分野に分けられている。

<sup>45</sup> 戦争期間(1938～1945年)を除いて考える。

翻訳され、そしてその日本語版に基づいて中国語に翻訳されたものも含まれている。他の言語より日本語から中国語に翻訳するほうが訳者にとって便宜的だと思われ、日本語版があれば、原著ではなく、それを底本にするのは普通だったようである。

以上のように「経験」の抽象的意味は 19 世紀の最後、遅くとも 20 世紀の最初までに中国語に逆輸入されたと推定したので、1896～1911 年の間に出版された 32 冊の翻訳(出版)時期を確認した。その結果、比較的早い時期に翻訳されたものは『物競論』<sup>46</sup>などの加藤弘之の著作<sup>47</sup>と『哲学要領』、『妖怪学講義録総論』などの井上円了の著作<sup>48</sup>であることが分かった。そのほか、蟹江義丸の『西洋哲学史』<sup>49</sup>や藤井健治郎の『哲学汎論』<sup>50</sup>なども同じく 20 世紀最初の頃に出版された。

これから「経験」の見られる文脈を挙げながら、その意味を確認しておく。なお、日中両語における意味用法を考察するために、日本語の原文とその中国語訳を対照しながら見るのは理想的だが、中国語版が見られないものが多いため、ここでは日本語の原文だけを挙げる。

(前略)然れども哲学の材料は科学の供給する所にして、経験的事実と矛盾せる哲学組織は到底成立すること能はざるが故に、哲学は決して根本的に科学と衝突するものにあらず。勿論或る哲学組織は科学と衝突することなきにあらず。

(しかし哲学の材料は科学が供給するもので、経験的事実と矛盾している哲学組織は到底成立することができないため、哲学は決して根本的に科学と衝突するものではない。もちろんある哲学組織は科学と衝突することがないこともない。)

(蟹江義丸『西洋哲学史』、1899(明治 32)年)

且つ科学は認識の二方法中、第一の知覚を寵用して観察と実験とを重とし、之に反して哲学は真理に達するの道として、思考を重視せり。之れ其特殊科学は日常経験の觀念に近邇して為めに解し易しと雖ども、哲学は益々高等なる概念法則に昇進し、従て之を悟り難き所以なり。

(且つ科学は認識の二つの方法の中、一つ目の“知覚”を多用して、観察と実験を重んじ、それに対して哲学は真理に達する道として、“思考”を重視している。その特殊科学は日常経験の觀念に近づき、そのためにわかりやすいが、哲学はますます高等な概念法則へと昇進し、従ってこれがわかりにくい理由である。)

<sup>46</sup> 原著名は『強者の権利の競争』(加藤弘之、1893(明治 26)年)で、中国語訳は楊蔭杭による。譚(1980)によると、中国語版の出版は 1902 年になっているが、宋(2017)によれば、1901 年だという。

<sup>47</sup> 宋(2017)によると、加藤の著作は他の哲学書より早く翻訳されたのは、当時に「中国国内の進化論ブームにより需要が高まった」からという。また、『物競論』以外に、作新社訳『加藤弘之講演集』、呉建常訳『天則百話』(1902(光緒 28)年)；訳者不詳『道德法律進化之理』(1903(光緒 29)年)；陽廷棟訳『政教進化論』(1911 年前出版)などがある。

<sup>48</sup> 羅伯雅訳『哲学要領』(1902(光緒 28)年)；訳者不詳『哲学微言』、汪嶽訳『印度哲学綱要』、徐渭臣訳『続哲学』妖怪百談』(1903(光緒 29)年)；蔡元培訳『妖怪学講義録総論』(1906(光緒 32)年)などが見られる。

<sup>49</sup> 蟹江義丸著『西洋哲学史』(1899(明治 32)年)、中国語版は 1903(光緒 29)年出版されたという。訳は范迪吉等による。

<sup>50</sup> フォン・キルヒマン著、藤井健治郎訳『哲学汎論』(1899(明治 32)年)。中国語版は范迪吉等訳、1903(光緒 29)年出版されたという。

此他にも猶憶説の真理なる事を証明する所の手段あり、…憶説より推演せられたる結果は精密に経験と一致し、且経験上の凡その事件は充分此憶説によりて、説明せらるることあらば、其憶説は真理なるなり。

(そのほかにも憶説が真理であることを証明する手段がある。…憶説より推論、演繹された結果が精密に経験と一致し、しかも経験上のおおよその事件は充分にこの憶説によって説明できることがあれば、その憶説は真理であるようだ。)

(フォン・キルヒマン著、藤井健治郎訳『哲学汎論』、1899(明治32)年)

以上の3例のいずれにおいても、「経験」は現代語と同じ意味用法だと言える。「経験」は必ずそのまま中国語版に借用されたと断言できないが、前に挙げた「日本農政維新記」の例と同じように、日本語に出ている漢語を原文の通りに書き写した可能性がかなり高いと考えられる。それはそもそも中国語において「経験」は馴染みのある語だからである。「日常経験」など、「経験」は“実際に見たり、聞いたり、行なったりすること”を意味する場合、中国語に由来から“見聞する”という意味用法があるため、文脈があれば容易に理解できるのだろう。また、抽象的な意味用法は従来のないものと言っても、従来の意味用法と関連しているので、敢えてほかの語にする必要がない。

以上のように、抽象的な意味を持つ「経験」は日清戦争後の日本書翻訳の風潮によって中国に伝播した。中国語において従来のない意味だが、「経験」自体は古くから存在して馴染みのある語であるため、素早く中国語に受け入れられた。

#### 4. 結論

本論文では、日中同形同義語である「経験」の両言語における語義変容について考察し、その背後に潜む日中両語間の相互影響も検討した。

「経験」は5世紀の中国で在来語として既に見られており、原義は“検証を経た”である。その後“検証する”や“民間秘法”などの拡張的な意味が現れたが、その使用はほとんど漢方医学の文脈から離れてはいなかった。

17世紀になると、漢方医学書が日本へ輸出され、日本語で書かれる漢方医学資料に「経験」が使われ始めた。当初はほぼ原義を踏襲したが、18世紀の用例において既に“治療過程の全般”、“検証する”の意味が現れた。そこから更に拡張し、また当時の洋書翻訳の需要にも伴って、“試み(農業などにおいての実験)”、“(自然科学の)実験”などの新義が相次いで出現し、「経験」は「experiment」の訳語とされた。その後、「経験」は直接「experience」の訳語として使用されてはいないが、西周は observation と experience の関係を論じる際、「経験」を「experience」と関連させた。初めて「経験」を「experience」の訳語に確定したのは『哲学字彙』である。そこから「経験」は“感覚や知覚を介して実際に生じた主観的状態や意識内容”という哲学上の意味と、“実際の見聞によって得た知識や技能”という抽象的な意味も獲得した。以上のように日本では1630年代から1880年代に亘って、日本語の独自の発展によって、中国から輸入した医学専門語の「経験」は現代語のその意味用法に至った。

一方、前述のように中国語で「經驗」は専ら漢方医学関係の資料に用いられ続け、意味の拡張は見られたが、日本語のように訳語として使われたり、抽象的な意味を獲得したりしなかった。だが、19世紀末から20世紀初頭の用例を見れば、“実験”や“実際の見聞によって得た知識や技能”の意味で用いられているものが一気に出てきた事が分かる。それは日本語から影響を受けた結果だと思われるが、本論文はその具体的なルートも検討した。

「經驗」の語をめぐる日本語から中国語への影響ルートは三つに分けることができると考えられる。即ち、遊歴官員による伝播、19世紀末の蚕業改革における日本との交流と、日清戦争後(1895年～)の邦書に対する大規模な翻訳活動である。遊歴官員による伝播については未だ明確ではないが、それは蚕業改革と共に“試み(実験)”の意味を中国に紹介したと考えられる。当時、日本語において「經驗」は抽象的な意味で定着し、“試み(実験)”の用例が少なくなり、その影響も局所的な範囲に限られていた。一方、20世紀の最初に見られた日本哲学書の中国語版は「經驗」の抽象的な意味を知らせた。元々馴染みのある語である上、抽象的な意味でありながら従来の意味と関連して分かりやすいため、『申報』に頻繁に用いられ、早い拡散と普及の過程を見せた。

## 5. おわりに

本論文は、日中両語の相互影響を考慮に入れ、両語それぞれにおいて「經驗」の語義変化に一貫した解釈を与えようと試みた。確認できた用例は限られているため、証拠が乏しくて論述に疎漏があるかもしれない。「經驗」の語史についての訂正や厳密化及び「經驗」の関連語に対する考察は今後の課題にしたい。

## 参考文献

- 王曉秋(1998)「傅雲龍の日本研究の業績と特色—『遊歴日本図経』を中心に」『日本研究』18:95-116
- 樺島忠夫・飛田良文・米川明彦(1984)『明治大正新語俗語辞典』東京:東京堂出版
- 高名凱・劉正焱(1958)『現代漢語外来詞研究』北京:文字改革出版社
- 近藤春雄(1985)『日本漢文学大事典』東京:明治書院
- 佐藤喜代治(1971)『国語語彙の歴史的研究』東京:明治書院
- 佐藤亨(2007)『現代に生きる幕末・明治初期漢語辞典』東京:明治書院
- 沈国威(1994)『近代日中語彙交流史—新漢語の生成と受容』東京:笠間書院
- 錢鷗(1997)「羅振玉・王国維と明治日本学界との出会い:『農学報』・東文学社時代をめぐって」『中国文学報』55:84-126
- 宋曉煜(2017)「清末における加藤弘之の著作の翻訳および受容状況—『強者の権利の競争』とその中国語訳を中心に—」ICCS 現代中国学ジャーナル 10(1):89-106
- 惣郷正明・飛田良文(1986)『明治のことば辞典』東京:東京堂出版
- 譚汝謙主編,小川博編輯(1980)『中国訳日本書総合目録』香港:中文大学出版社
- 古田東朔(1968)「明治以降の意味の変化」『言語生活』204
- 文化庁(1978)『中国語と対応する漢語』東京:大蔵省印刷局
- 松井利彦(2016)「近代漢語の初期使用の検証—初出漢語とその機能—」『近代語研究』
- 松本守(2000)「明治期の『経験』『実験』『試験』」『専修国文』67:1-20
- 安井惣二郎(1968)「日本の哲学用語:その起源と問題」『滋賀大学教育学部紀要』18:75-80
- 李永芳(2012)「藤田豊八—清末西方農学引進的の先行者」『社会科学』8:142-149
- 劉正焱等編(1984)『漢語外来詞詞典』上海:上海辞書出版社

「經驗」年表

(A) 中国語における用例

年代	資料名	出現形	意味
5世紀	陶潛 搜神後記	頗有經驗	O
652(永徽3)	孫思邈 備急千金要方	胡居士之經驗	書名
682(開耀2,永淳元)	孫思邈 銀海精微	經驗洗肝散	O3
752(天寶11)	王燾 外台秘要方	經驗	O2
1110(大觀4)前後	葛洪 肘後備急方	經驗方,經驗後方[集驗方,聖惠方]	書名
	蘇軾 沈括 蘇沈良方	經驗	O2
1127~1279	陳文中 小兒痘疹方論	[此藥家伝五世累経効験]	
1132(紹興2)	許權微 類証普濟本事方	經驗産室,經驗方	O'
1170(乾道6)	衛濟宝書	經驗旧方	O'
1196(慶元2)	李迅 集驗背疽方	經驗者	O'
1224(嘉定17)	張杲 医説	經驗甚多	O2
1225(宝慶元)~	産科經驗宝慶集	經驗	O2
1227(宝慶3)~1304(大徳)	王惲 秋澗集	博採經驗	O3
1307(大徳11)	馬端臨 文献通考	類其經驗方成此書,家蔵經驗方,胎産經驗方	O'
1314(延祐元)以降	魯明善 農桑衣食撮要	農家毎歳經驗之言,農家經驗之言	O'
1326(泰定元)	沙因穆蘇 瑞竹堂經驗方	經驗方,悉已經験[累経効験]	O
1335(至元元)	齊徳之 外科精義	累試經驗,經驗方	O,O'
1337(至元3)	危亦林 世医得効方	經驗如神,經驗捲栢散,經驗方也	O,O'
1370(洪武3)以前	楊維禎 東維子文集	親所經驗者	O1
1378(洪武11)	楊清叟 仙伝外科集驗方	經驗品	O'
1390(洪武23)	朱橚、滕碩、劉醇等編 普濟方	經驗,經驗方,經驗良方,經驗神効,[此藥家伝五世累経効験]	O,O'
1406(永樂4)	呉澄 呉文正集	經驗之藥,經驗方,悉已經験	O,O'
1426(宣徳元)~1496(弘治9)	張寧 方洲集	不必一一經驗	O1
1487(成化23)~1566(嘉靖45)	郎瑛 七修類稿	或自己經驗者	O1
1552(嘉靖31)-1578(万曆6)	李時珍 本草綱目	屢試經驗,有人經驗	O',O1
16世紀末	呉承恩 西遊記	經驗的好方,有何經驗	O',O
1590(万曆18)前後	葉春及 石洞集	經驗	O1

1590(万曆 18)	王世貞 弇山堂別集	臣師嵩所經驗也	O1
1591(万曆 19)	屠隆 遵生八箋	或得經驗	O2
1598(万曆 26)～1603(万曆 31)	楊寅秋 臨皋文集	經驗毒藥	O'
1617(万曆 45)	張燮 東西洋考	姦商籍經驗護送之名	O
万曆間	唐元竑 杜詩攷	經驗者	O
1609(万曆 37)～1646(順治 3)	曹学佺 蜀中広記	經驗藥方	O'
1620(万曆 48)	明焦竑 国朝猷徴録	輯録医薬經驗者,經驗方	O2,O'
1639(崇禎 11)	陳子龍等編 皇明経世文編	經驗之方,臣所經驗也	O',O1
1640(崇禎 12)	張景岳 景岳全書	經驗方,經驗法,經驗猪肚丸,經驗秘真丹,經驗神方	O',O3
1643(崇禎 16)	錢謙益 牧齋初学集	君以已効之医挾經驗之方	O'
1619(万曆 47)～1692(康熙 31)	王夫之 詩経稗疎	經驗方	O'
1663(康熙 2)後	庄廷鑑 明史抄略	曾經験否	O1
1676(康熙 15)	黄宗羲 明儒学案	一生經驗而後得之	M1
1715(康熙 54)	李光地 御定月令輯要	經驗方	書名
1726(雍正 4)	世宗憲皇帝朱批諭旨	明試以功臨事經驗	試練を耐えられる
1727(雍正 5)前	查慎行 敬業堂詩集	經驗始深信	O
1732(雍正 10)	謝道承 福建通志	簡便經驗二方各一卷,經驗奇方	書名,O
1735(雍正 13)	施維翰、趙士麟等 浙江通志	經驗方,經驗良方	O,O'
1736(乾隆元)	尹繼善、趙国麟等 江南通志	經驗鍼法	O'
1740年代～70年代	曹雪芹 紅楼夢	經驗過	M1
1770(乾隆 35)	魏之秀 続名医類案	予以經驗既多,經驗方,經驗某方	O,O'
1778(乾隆 43)	胡端敏奏議	以是於病情医薬經驗頗多	O
1779(乾隆 44)	陳言 三因極一病方論	經驗之藥	O'
1773(乾隆 38)-1782(乾隆 47)	御選明臣奏議	劉文彬妄造經驗仙丹	O3
1781(乾隆 46)	和珅等 欽定熱河志	夔冬蔓茂經驗紫微日行三百	?
	孙灝 河南通志	古今經驗之方而庸医誤用之,經驗方書	O,O'
1860(咸豊 9)～1909(光緒 34)	張文襄公選集	經驗之方剂	O'
1874(同治 12)以降	同治甲戌日兵侵台始末	事非經驗,臣實未敢臆斷	O
1879(光緒 4)	王梓材、馮雲濠 宋元学案	經驗鍼法	O'
1875(同治 12)～1908(光 33)	冷佛 春阿氏謀夫案	經驗	M1

1881(光緒 6) 1108	申報 育兒經驗求是法	經驗求是法	O'
1883(光緒 8) 0818	申報 治癩狗嚙傷毒發欲死經驗救急神効方	親目所擊經驗者	M1
1885(光緒 10)1207	申報 論病論藥說など	此等藥性不得盡信本草,須多閱方書及試用經驗而領會之	O2
1888(光緒 13)1031	申報 書鐵路稟稿後	津沽鐵路之實効可以經驗章程可以依倣	O1
1892(光緒 17)0725	申報 發奇落案	經驗之醫生	O'
1897(光緒 22)	皇朝經世文編	西人經驗之良方,經驗以球昇高六百五十尺,其器之用法經驗頗合稱意,美利加砲台經驗說	O,M3
1902(光緒 27)	皇朝經世文新編續集	經驗之方劑,經驗之說,經驗專書,他人之經驗	O',O5,M1+2
	皇朝蓄艾文編	經驗,數年經驗,經驗記	M1,M1+2
	梁啓超 新民說 第 18 節論私德	實際經驗之言	M1+2
1905(光緒 30)	申報 論禁米出口之無益於民生	以最淺顯之經驗証明之,經驗之教育家,經驗者,經驗之員,頗有經驗	M1+2,O'
1906(光緒 31)	申報 謹注四月初二日 上諭など	弁事之有經驗,富於實地之經驗者也,教育家之經驗,經驗較淺,學界政界之經驗者,研究經驗,平素之經驗,多從經驗得來,實地之經驗尚少	M1+2
1907(光緒 32)	申報 旅行的目的など	有經驗,富於經驗,經驗淺,無經驗,經驗較深,經驗時代,經驗力,經驗之豐富,學識經驗,商界之經驗與實力,知識經驗,依經驗定期限之長短,積幾許經驗,經驗既久	M1+2
1908(光緒 33)	顏惠慶英華大辭典	empiric: n.經驗者,實驗家,練習者,習而知者;庸医 empiric,empirical: n.閱歷的,經驗的,練習的;實驗哲学,經驗之哲学 empiricism: n.依賴經驗,主經驗,由經驗而無學術;(哲)經驗論 empiricist: n.恃經驗而無學術者,經驗家 experience: n.經驗,歷見,經驗,實驗 experiential: a.自實驗閱歷得的,經驗的 feel: to experience, 經驗,經歷,遇 guiltless: having no experience, 欠閱歷的,無經驗的 quackery: empiricism, 庸医之經驗,庸医治療 stagery: a practitioner, 高手,經驗家 trial: experience, 閱歷,歷練,經驗,經歷 try: to experience, 經驗,經歷,遭遇 unexperimental: a.不實驗的,不經驗的,不試練的	M1+2,M4

		untried: not yet experienced,未閱歷的,未經驗的 veteran: long practised or experienced,久練的,多閱歷經驗的	
1910(宣統元) 0115	申報 擬將蘇府中学附属江蘇師範學堂案	有練習然後有經驗	M1+2
1911(宣統 2)	衛禮賢德英華文科學字典	empirie, empirismus: empiricism,經驗論,經驗學 erfahrung: experience,經驗,練過	M4
1912(宣統 3)以降	徐珂 清稗類鈔	社會交際之經驗, 經驗最富者	M1+2
1913(中華民國 2)	商務書館英華新字典	aeroscopy: n.經驗空氣之事 empiric: n.經驗者,練習者,習而知者,庸醫 empirically: adv.習練,學習,閱歷,經驗 empiricism: n.經驗論,經驗學,經驗之治術,庸醫之療治 fare: n.運費,食用,經驗,境況 inexperience: n.未經練,無經驗,無閱歷 practice: n.習練,習行,經驗	M3,M1+2,M4
1916(中華民國 5)	赫美玲官話	empiric, empirical: a.經驗的,實驗的 ---formula, 實驗式,經驗式(部定) empiricism: n.經驗論(新) experience: n. v.t.經歷,經驗(部定) experienced: a.有經驗的 inexperienced: a.沒有經驗的, inexpert: a.沒有經驗 practical: ~experience, 實際之經驗, 實地見習, 實地見識, 閱歷過 therapeutics: n. pl.療學(新), (empirical)經驗療學(新), 理由未明的療法(新) treatment: empirical~, 經驗治法 transcendent: a. 超經驗的	M1+2,M4
1921(中華民國 10)	社會哲學與政治哲學的內容	試驗與經驗的區別	M4
1922(中華民國 11)	歐陽竟無 佛法非宗教非哲學而為今時所必需	經驗, 經驗論	M4
1922(中華民國 11)	近代西洋哲學史大綱	英國經驗派	M4
1924(中華民國 13)	內學研究	經驗	M1
1925(中華民國 14)	與章行嚴書	經驗	M4
1955	顏氏家訓叙錄	一條安身立命的經驗	M1+2

## (B)日本語における用例

年代	資料名	出現形	意味
1000~1299	明黄廉述 江戸写 秘伝経験痘疹治方	経験良方【漢文中の使用】	O'
1632(寛永 9)	吉田宗恂 南北経験医方大成鈔	経験方,経験薬【初出】	O'
1666(寛文 6)	明孟継孔撰 小森六兵衛刊 新刻幼幼集4	経験者,経験良方(ケイゲン)【漢文中の使用】	O'
1795(寛政 7)	津田玄仙 療治茶談 6	コノ二人ノ経験,コレヲ経験アリケル,経験ニ及ベル	O2,O1
1803(享和 3)	明朱棟隆撰 新刊経験痘疹不求人方論	経験痘疹不求人方論,[奇験諸方]	O'
	金鳳子 麻疹得効方	経験麻疹得効方,[治嗽験方]	O'
1809(文化 6)	和久田寅 腹証奇覽後編	多く用テ経験スル	O1
1817(文化 14)	佩芳園主人 経験千方	経験千方	O'
1822(文政 5)	榛斎訳述,宇田川榕菴校補 遠西医方名物考	経験ニ拠テ,経験ノ良方,経験発明セル,先哲ノ経験シテ論定セル,経験説,嘗テ経験セル一ノ患者ヲ左ニ略挙ス,経験,経験ノ諸説,効アル経験説,経験シテ奇効ヲ奏ス,先哲ノ経験ニ随ヒ,経験方	O2,O',O1
1823(文政 6)	曲亭馬琴書簡	経験うすく	O4
1839(天保 10)	西脇秀挺 経験良方	経験良方	O'
1843(天保 14)	池田霧溪 治痘論	経験治痘論	O'
1853(嘉永 6)	三宅春齡 補憾録 2	牛痘経験,防御スルノ経験,接痘ヲ行ノ経験,接人痘ノ経験,効ヲ奏スルノ経験,遷延ノ経験,経験説,経験スル,経験ヲ語ル,経験アリヤ否ヤ,経験ヲ累ル,経験甚多シ,未経験セス	O2,O1
1857(安政 3)	扶氏経験遺訓	経験	O2
1866(慶応 2)	福沢諭吉 西洋事情 初編巻 1	経験ヲ遺シテ	証拠
1867(慶応 3)	福沢諭吉訳 雷銃操法 1	小銃ノ経験,[試験]	検査
	ジェームス・カーティス・ヘボン 和英語林集成	experiment: kokoro-mi,kei-ken experienced: nareta, yeteta, jukush'ta, tokui	O5
1870(明治 3)	権田直助 述 経験略疫門口義	経験	O'
	西周 百学連環	経験:observation 経験上:experimental	M1
1871(明治 4)	スマイルス著 中村正直訳 西国立志編 4	経験ヲ始タリシガ,益々経験ヲ積ミ,経験ヲ做シ事,電気ノ経験ヲ為コト,[経試(タメス)]	M3
1871(明治 4)	中神保抄訳 電気論	種々の経験(タメシ)なる可シ,越歴久登留器を以てなしたる経験の一二条	M3
1872(明治 5)	中村正直訳 自由之理 3	譬ヘバココニ頗ブル経験シテ事理ニ通ズル人ノアランニ	M3

	仮名垣魯文 安愚楽鍋	腎葉もちひた経験(けいげん)	O4
	ジェームス・カーティス・ヘボン 和英語林集成(第2版)	experiment: kokoro-mi, keiken, tameshi experienced: juku-ren shite oru, tasshitaru, tan-ren shitaru, narete iru, jukushitaru, yeteru prove: tamesu, kokoro-miru, shoko wo tateru, keiken suru, sadameru	O5,M3,O1
1873(明治6)	高橋正純輯 病院経験方府	経験方	O'
1874(明治7)	西周 致知啓蒙2	特別ノ経験ヲ集メテ,経験上	M4
1877(明治10)	永井保興著 養蚕適要1	桑ノ代葉経験ノ説,其経験ヲ為スコト,諸葉ヲ与ヘ経験セシ,養蚕得失経験ノ説	O5
	永井保興著 養蚕適要2	蚕室ノ築造地町経験ノ説	O5
1879(明治12)	田島弥平(邦寧) 養蚕新論続3	蚕ヲ養フヲ経験セシ事	O5
	医事新聞27	河豚中毒経験説,経験医談	M1,O'
	農業雑誌110	少年耕作の経験	O5
1881(明治14)	井上哲次郎 哲学字彙	empiricism:経験論,経験学, experience:経験,練過 [empirical:経練律(論),empirical philosophy:経練哲学,observation:観察]	M4
1882(明治15)	田中玄達述 外科療法:実地経験1	実地経験ノ足ラズシテ	M1+2
	菊池大麓 論理略説下	経験真事(エムピリカル、トウース),経験定綱	M4
1883(明治16)	農業雑誌174-5,178	経験農業百説,田畔に稲を植付たる経験	O',O5
	弘医月報25,28	新治法及経験,奇症経験	O2
	常盤木秀慶 金魚愛玩経験録	経験録	M1
	杉山藤治郎 政談学術演説討論種本	経験学,経験ノ功大ナル,経験ヲ積ム	M4,M1
1884(明治17)	豊田修達 虫病原論:活物窮理1	虫病治療経験案	O'
	小野田孝吾 珍事奇聞:一読百驚1	絞首苦痛の経験,経験上より	M1,M4
1885(明治18)	鮫島晋小学物理教授本上	経験ノ定義	M1+2
	手塚義三郎 病床治験録:明治医家	水腫経験ノ説	O2
	手塚義三郎 明治医家病床実験集	水腫経験ノ説,河豚中毒の説,[実験説],[親ク実験スル處ナリ],[諸君子ノ試験ヲ経テ]	O2
	フルベッキ述 耶蘇教証拠論	未信者ノ経験,信者ノ経験,経験ノ証拠	?,O'
1886(明治19)	有賀長雄 心理学:教育適用	経験ヲ受クル,経験シタル所,八十代ノ経験	M1+2
	ダブルユー・デニング 講述 論法講義1	経験ニ根拠スル,経験ニ依リ	M1+2
	農業雑誌237,240	経験方	O'

	大日本農会報告 58,63	ウエルナア氏経験の小麥試作法,実地経験	O1,O5
1887(明治 20)	藤野富之助編 製造独案内:実地経験 一名・工芸百般製法新書	実地経験	M1+2
	トークヴィル 肥塚龍重訳 自由原論 5-8	経験	M1
	石原孫一郎編 技術全集:実地経験	実地経験	M1+2
	大日本農会報告 69	経験説	O5
	福岡照編 起業立志の金門:一名・米行者必携	実地経験	M1+2
	ブーロトン 近世日耳曼	経験学,経験上,新奇ノ経験	M4
	ラルネット 経済新論後編	経験上ノ結果	M4
	井上円了 心理摘要	外界ノ経験	M4
	田村多門 実地養蚕論:学理経験	経験	O5
	児島栄太郎 染色法:新發明実地経験	実地経験	O5
	明石錠五郎(無一散人) 金のなる木:実地経験	実地経験	O5
	島田豊編訳 附音挿図和訳英字彙	empiric:経験ヲ主トスル人,実験家,自己ノ経験ノミニ據ル人,庸医〔ヤブイシヤ〕 empiric,empirical:経験上ノ,実験ヲ本トスル,経歴ニ依レル empirically:経験ニ依リテ,理ヲ離レテ empiricism:実験家ノ行為,経験上ノ治療,庸医ノ治術,〔哲〕経験論 experience:経験,経験スル,経験シタル see:実験スル,経験スル test:試験,経験	M1+2,M4
	イーストレイキ 棚橋一郎 ウェブスター氏新刊大辞書和訳字彙	experience:経験,練磨,功,發明,見識,試験;経験スル,發明スル,練磨スル,経験シタル see:会得スル,弁別スル,経験スル test:試験,経験	M1+2,M4
1887 以後	清野勉 講義 論理学・帰納法	経験的理法	M4
1890(明治 23)	加藤弘之 経験と学問	経験と学問	M4
1892(明治 25)	石井了一,石井福太郎 高等小学修身口授教案	失敗は経験の父、困難は創造の母なり	M2
1893(明治 26)	多田房之輔 小学教師及校長	経験に富まざるべからず	M1+2
	心理学百問百答	経験及ビ連合	M4
	ヘルマン・ケルン 教育精義	史料及ビ理科教授ヲ以テ経験と交際とを補フ事	M1+2

1894(明治 27)	改訂増補和英英和語林集成	experiment: kokoromi, keiken, tameshi, shiken experience: nashite shiru koto, shite satoru koto, tameshite shiru koto, keiken, remma prove: tamesu, kokoromiru, shoko wo tateru, keiken suru, sadameru, shomei suru	O5,M1+2,O1
1896(明治 29)	松永伍作 蚕桑実験説	是迄の経験(ためし)に據れば	O5
1897(明治 30)	三村隆蔵 実験蚕桑	経験の初歩	O5
1898(明治 31)	高島平三郎 心理漫筆	経験は最良の教師なり	M1+2
1898 以降	松本文三郎 講義 認識論提要	経験的必然,経験認識	M4
1899(明治 32)	ヴェント 心理学概論上巻	経験的心理学,直接経験	M4
	加藤弘之講義集第三	実地経験	M1+2
	蟹江義丸西洋哲学史	経験的事実	M4
1900(明治 33)	加藤弘之講演全集	経験	M1+2,M4
1900 以降	波多野精一述 哲学概論	経験的世界観,経験的立脚地	M4
	紀平正美 講述 哲学概論	経験論	M4
	松本文三郎 講義 哲学概論	経験説	M4
	久米邦武 講述 日本古代史	歴史の経験	M1,2

#### 凡例・注

- 1) この年表は主として 20 世紀までの日中両国の文献における「経験」という文字連続の出現状況を示す。ただし、「経験」の2字が構成素を成さないことが明白なもの(「按経験緯」「未経験明」など)と仏教用語としての使用例は除く。
- 2) 「経験」に関連する各種の表現の出現例を[ ]に入れて示す。
- 3) 年が不詳である場合、筆者の推定によって示す。執筆年の分かる場合はそれを用例の年として認定する。従って、用例が刊行年よりも早い時期に配置されることがある。
- 4) 原文においてルビの形でもしくは前後の文脈中に示されている英語の原語は( )に入れて示す。
- 5) 文献名と意味は記入スペースの制約上必要に応じて調整して示す。番号と意味の対応関係は以下に示す。  
O: 検証を経た O': 検証を経て(評判が良い)  
O1: 検証(する) O2: 治療過程全般(方剤、病例) O3: 民間秘方 O4: (薬の) 効き目 O5: 試みる/試す、試み/試し  
M1: 見聞する/見聞したこと(見たり聞いたり行なったりすること) M2: 見聞による知識  
M3: 実験 M4: (哲) 感覚や知覚を介して実際に生じた主観的状态や意識内容